

## 「大目乾連冥間救母變文」訳注（五）

小松謙・井口千雪・大賀晶子・川上萌実・孫琳淨・  
玉置奈保子・田村彩子・藤田優子・宮本陽佳

本訳注は、「大目乾連冥間救母變文」について、目にするのできるテキストの全文をあげて異同の全体像を示すとともに、注釈と訳を施したものである。原文については、抄写が行われた当時における用字意識を探るため、本文校訂は行わず、明らかな誤字・略字や修正の跡も含めて、可能な限り原文のまま再現することを目指した。踊り字や周辺に書き込まれた記号も、できる限り原型に近い形で示すことにした。

最も完備したテキストであるS2614を底本とし、他のテキストを並列する形を取る。訳文については、複数の解釈が成り立ちうる場合については仮に一つの訳を附し、注でさまざまな可能性について論じる形を取っている。

本訳注は、京都府立大学において開催している敦煌変文研究会の成果である。今回の訳注作成担当者は、それぞれの担当箇所後に名前を附している通りであるが、本成果は無論、今回の訳注作成担当者以外のメンバーらを含めた研究会における議論の上に成り立つものであり、また彼らは原稿の確認・修正等の作業に従事しているので、全員を共著者とする。

分量が多いため、分割して掲載する。本稿はその第五部分である。これまでの掲載誌は以下の通りである。

- (一)『京都府立大学学術報告 人文』第七〇号(二〇一八年二月)
- (二)『和漢語文研究』第一六号(二〇一八年二月)
- (三)『京都府立大学学術報告 人文』第七一号(二〇一九年二月)
- (四)『和漢語文研究』第一七号(二〇一九年二月)

### 【使用テキスト】

今回訳注を作成した部分については、次のテキストを使用した。なお、黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』と対照する際の便宜を考えると、以下本文をあげる際にはテキスト番号と同書における略号を併記する。( ) 内に記すのが当該の略号である。

- S2614 (原)
- P2319 (甲)
- BD00876 (戊)
- BD04085 (己)
- BD03789 (庚)

## S3704 (辛)

※近年の動向を鑑み、戊巻・己巻・庚巻の写本番号については『敦煌變文校注』が依拠する千字文号(盈字76号・麗字85号・霜字89号)から北敦号(BD00876・BD04085・BD03789)へと改めた。

※北京844も目連救母故事を題材とする変文であるが、文章が全面的に異なるため、本訳注では取り扱わない。

## 【凡例】

- ・字体は可能な限り原文に従った。
- ・□は欠字。紙が破れているために欠字になったと思われる部分など。
- ・■は判読不能の文字。
- ・×は、他のテキストに存在する本文が、あるテキストにはないことを示す。
- ・はつきり見えないがおそらくその文字であろうと思われる場合には、字の回りに□を附す。例・望
- ・単に字形が似ていることによる誤字と思われる場合は「ママ」記号を附して、注はつけない。
- ・小字は字の周辺(右上・右横・右下)に書き込まれている字である。
- ・小字の「乙」は倒置を示す記号と思われる(日本漢文におけるレ点)。原本では「レ」に見える例も多いが、「乙」に統一する。
- ・字の右横に記される「ト」は誤字を示す記号と思われる(日本におけるみせげち)。
- ・台詞と思われる箇所には「」を入れる。

・韻文部分は全文二字下げとする。

・注の引用文献については、できるだけ近年の校訂を経た刊行物で確認し、初出時に書誌情報を記している。書誌情報を記していないものは、仏典については『大正新脩大藏經』、その他は『文淵閣四庫全書』によっている。

・参照した活字本・校注・辞書類は以下の通りである。

黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』(中華書局 一九九七年)・『校注』と略称

王重民ほか編『敦煌變文集』(人民文学出版社 一九八四年)・『敦煌變文集』と呼称

項楚『大目乾連冥間救母變文』補校』(『四川大學學報叢刊』第二七輯『古籍整理研究』、一九八五年。のち項楚『敦煌語言文學論集』[上海古籍出版社 二〇一一年]所収)・『項楚校』と略称

項楚『敦煌變文選注(增訂本)』(中華書局 二〇〇六年)・『選注』と略称

蔣禮鴻『敦煌變文字義通釋』(中華書局 一九五九年、上海古籍出版社 一九八一年(增訂本))・『蔣禮鴻』と略称

中村元『廣説仏教語辞典』(東京書籍 二〇〇一年)・『広説』と略称

・その他、主として以下の辞典類を参照した。

古田紹欽・金岡秀友・鎌田茂雄・藤井正雄『仏教大事典』(小学館 一九八八年)

石田瑞麿『例文仏教語大辞典』(小学館 一九九七年)

中村元ほか編『岩波 仏教辞典 第二版』(岩波書店 二〇〇二年)  
望月信亨編『望月佛教大辞典』(世界聖典刊行協会 一九五四年)  
織田得能編『織田佛教大辞典』(大蔵出版 一九五四年)  
江藍生・曹廣順編『唐五代語言詞典』(上海教育出版社 一九九七年)

23

《散文》

S2614 (原) : 目連蒙仏威力、×得見××慈母。<sup>(一)</sup> 罪根深結、業力難  
P2319 (甲) : 目連蒙仏威×、重得見××慈母。罪根深結、業力難  
BD00876 (戊) : 目連蒙仏威×、重得見××慈母。罪根深結、業力難  
BD04085 (丁) : 目連蒙仏威×、重得見地獄慈母。罪根深結、業力難  
排、雖免地獄之酸、墮在餓鬼之道。悲辛不等、苦樂玄殊、若並前途、<sup>(二)</sup>  
排、雖免地獄之酸、墮在餓鬼之道。悲辛不等、苦樂玄殊、若並前途、<sup>(三)</sup>  
排、雖免地獄之酸、墮在餓鬼之道。悲辛不等、苦樂玄殊、若並前途、<sup>(四)</sup>  
排、雖免地獄之酸、墮在餓鬼之道。悲辛不等、苦樂玄殊、若並前途、<sup>(五)</sup>  
感其百千万倍。<sup>(六)</sup> 咽如針孔、滲水不通。頭似太山、三江難滿。無聞漿水  
感其百千万倍。咽如針孔、滲水不通。頭似太山、三江難滿。無聞漿水  
感其百千万倍。咽如針孔、滲水不通。頭似太山、三江難滿。無聞漿水  
咸其百千万倍。咽如針孔、滲水不通。頭似太山、三江難滿。無門將水

×之名、累月經年、×受飢羸之苦。<sup>(七)</sup> 遙見清涼冷水、近著變作膿河。<sup>(八)</sup>  
×之名、累月經年、×受飢羸之苦。遙見清涼冷水、××變作膿河。  
水之名、累月經年、×受飢羸之苦。遙見清涼冷水、近著變作膿河。縱  
×之名、累月經年、被受飢羸之苦。遙見清涼×水、近著變作膿河。縱

得美食香飡、便即化為猛火。<sup>(九)</sup> 孃々見今飢困×、命若懸絲。<sup>(一〇)</sup> 汝若不去  
得美食香飡、便即化為猛火。孃々見今飢困×、命若懸絲。汝若不去  
得美食香飡、便即化為猛火。孃々見今飢困×、命若懸絲。汝若不去  
逢美食香飡、便即化為猛火。孃々×今飢困死、命如懸絲。汝若不起

×悲、豈名孝順之子。生死路隔、後會難期。欲救懸沙之危事、亦不應  
慈悲、豈名孝順之子。生死路隔、後會難期。欲救懸沙之危事、亦不應  
慈悲、豈名孝順之子。生死路隔、後會難期。欲救懸沙之危事、亦不應  
慈悲、豈名孝順之子。生死路隔、後會難期。欲救懸沙之危事、亦不應

遲晚。<sup>(一一)</sup> 出家之×法、依信施而安存。<sup>(一二)</sup> 縱有常住飲食、恐難消化。而辭  
遲晚。出家之×法、依信施而安存。縱有常住飲食、恐難消化。兒辭  
遲晚。出家之×法、依信施而安存。縱有常住飲食、恐難消化。兒辭  
遲晚。出家之×法、依信施而安存。縱有常住飲食、恐難消化。兒辭

×孃々、<sup>(一三)</sup> 日向王城舍之中、取飯與×孃々相見。<sup>(一四)</sup> 目連辭母、擲鉢騰空、  
×孃々、日向王城舍之中、取飯與×孃々相見。目連辭母、擲鉢騰空、  
×孃々、日向王城舍之中、取飯與×孃々相見。目連辭母、擲鉢騰空、  
×孃々、日向王城舍之中、取飯與×孃々相見。目連辭母、擲鉢騰空、

阿嬢×、往向王舎城×中、取飯與阿嬢×相見。」目連×× ××××

須臾之間、即到王舎城中<sup>(三)</sup>。次弟乞飯、行到長者門前。長者見連<sup>ル</sup>目非

須臾之間、即到王舎城中。次弟乞飯、行到長者門前。長者見目連非

須臾之間、即到王舎城中。次弟乞飯、行到長者門前。長者見目連非

×××× 行至王舎城中。次弟乞飯、×到長者門前。××見××非

時乞食<sup>(二四)</sup>、盤問逗遛之處。

時乞食、盤問逗遛×處。

時乞食、般問追遛之處。

×乞飯、盤問追遛之處。

# 【現代語訳】

目連は仏の威力のおかげにて、慈母と再会することができましたが、罪の根は深く張り、業の力は排しがたく、地獄の苦しみこそ免れたものの、餓鬼道に堕ちました。悲しみつらさは異なり、苦楽の程も大違い。これからのことに比べれば、百千万倍にも感じられるつらさでした。(なれど今も) 呑み込もうにも針の孔を通すよう、滴る水も通りはしません。頭(腹?)は泰山のようで、三江の水も満たすことがなりません。飲み物や水の名を聞くこともなく、月や年を重ねて、飢餓の苦しみを受けています。遠く澄んだ冷たい水を目にしても、近づけば膿の河に変わります。たとえ素晴らしい食物や芳しい食事があっても、たちまち猛火にかわってしまします。「母は今飢えて、命は懸け

られた糸のように絶えかけています。おまえは慈悲の心を起こさねば、孝行息子と呼ぶに値しましょうか。生死の道が分かれば、再会は期待できません。懸けられた糸の危うさを救ってくれようというのなら、ぐずぐずしてはなりません。」「出家のおきてにては、施しによって身を落着けるもの。寺の食事があろうとて、消化できないのではないかと思われます。私は母上に失礼して、王舎城中に赴いて食事を手に入れてから、母上とお目にかかりましょう。」目連は母に別れを告げますと、鉢を空中に投げ、たちまちのうちに、すぐに王舎城中に着きました。順々に食事を乞うて、長者の門前にまいます。長者が目連が時ならぬに食を乞うのを見て、遅れたことについてたずねる場でございます。

# 【注】

(一) 目連蒙仏威力、×得見××慈母：P2319(甲)とBD00876(戊)は「目連蒙仏威、得見慈母」、BD04085(己)は「目連蒙佛威、重得見地獄慈母」とする。前文にも「承仏威力」があり、また『大方廣佛華嚴經』に多数の例があるのをはじめとして、「承佛威力」は仏典に多数の用例があるのに対し、「蒙佛威」は仏典では通常「蒙佛感恩」「蒙佛威神」といった形を取るのが常であって、底本が原型かと思われる。「目連」を除けば四言二句であったものを五言二句に改めたか。BD04085(己)はリズムより読んで意味がわかりやすいことを重視して、五言二句を改めたように思われる。

(二) 罪根深結：『佛説盂蘭盆經』に「佛言汝母罪根深結、非汝一人力

所奈何（佛は言われた。おまえの母の罪の根は深く張り、おまえ一人の力でどうできるものではない）」とあるのに基づくか。

(三) 悲辛不等：BD00876（戊）は「悲身不等」。意味が通じず、音に引かれた誤りかと思われる。悲しみつらさが同じではないということだが、何と同じではないのかがよくわからない。考えられるのは、①他とは異なるつらさ、つまりひどいつらさ。②苦しみは人ごとに異なる。③他の人と比べてよりひどいつらさ。④つらさが前とは異なる、つまり前より楽。以上のいずれも成り立ちうる。次句からすると、まだしも楽ということか。

(四) 玄殊：『正法念處經』卷二一に見える帝釋天の阿修羅に対する言葉に「汝之與我、相去殊」とあり、その前後に同様に「相去玄絶」「相去玄遠」とあることから考えて、「玄」は強調として用いられており、「おまえと私は全く異なる」という意味と思われる。「新集書儀」(P.3691・P.3716)には葬送に当たって用いる文例として、「臨殯云、生死玄殊、慈顔日遠（墓穴に臨んで言う。生死ははるかに異なり、慈愛あふれるお顔は日々遠ざかります）」と見える点から考えて、苦楽がはるかに異なるということであろう。校注は「玄」の下に「懸」と記し、同音ゆえの誤りと見ているようであるが、右の事例から考えて誤りではなく、かなり広く行われていた表記かと思われる。地獄に比べれば餓鬼道ははるかに楽ということか。

(五) 若並前途：唐の方干「上張舎人」詩に「海内芳聲誰可並、承家三代相門深（天下に名声を比べられる者がいまいしょうか、三代にわたり大臣輩出した奥深い家を受け継がれた）」とあるように、「並」は並

列する義から転じて比較する場合にも用いるようである。「前途」は通常ならこれからのこととなり、餓鬼道のことを指すかと思われる。しかし南宋の筆記『鬼董』（知不足齋叢書本）巻二に「一人衣青褐衣投宿曰、吾前途值盜。囊資皆罄盡（一人の青い粗末な衣を着た者が泊まりに来て言った。「私はここまでの旅路で盗賊に遭って、有り金残らず巻き上げられました）」のような例もあり、これまでの旅路、つまり地獄のこととも解釈できる。いずれであるかは次句の解釈に関わってくる。

(六) 感其百千万倍：BD00876（戊）・BD04085（己）は「感」を「咸」とする。「咸」であれば「減」の誤りである可能性も出てくる。「感」なら「百千万倍にも感じられる」となり、「前途」はこれからのことで、「地獄の苦しみはこれから比べれば百千万倍にも感じられるものだった」となる。「減」であれば「百千万倍も減りました」となり、「前途」はこれまでのことで、「これまでより百千万倍も減りました」となる。定めがたいところだが、底本の字形を尊重して「感」の方向で解釈しておく。

(七) 滴水不通：校注は遼の行均の『龍龕手鑑』などを引いて「滯」は「滴」の俗字とする。「孟蘭盆經講經文（擬）」(BD02296)に地獄の目連の母を形容して「咽喉別細如針鼻、飲嚙滴水而不容（のどは針穴ほどの極細で、滴る水を飲もうとて入りはせぬ）」とあることから考えても、「滴」と同じと考えて差し支えないであろう。

(八) 頭似太山：校注は「目連變文」の右に引いたくだりの続きに「腹蔵則寛於太山、盛集三江而難滿（腹の容量は泰山よりも広く、三つの



大河を集めても満たしがたい」とあることをあげて、「頭」は「腹」の誤りかとする。その可能性は高そうに思われる。

(九) ×受飢羸之苦：BD04085 (己) は「被受飢羸之苦」とする。この前後が四字句と六字句で構成されている点から考えて、この句だけが五字なのが不自然と感じて改めたか。「飢羸」は餓えてやせ衰えること。孟郊の「贈韓郎中愈」詩に「衆人尙肥華、志士多飢羸(世の人は肥えて華やかなのを尊ぶが、志士には痩せ衰えた者が多い)」と見える。『大般若波羅蜜多經』卷四三五に餓鬼道の苦しみを述べて「於鬼界中備受飢羸焦渴等苦(餓鬼の世界で餓えやつれ焦げ渴く等の苦しみを受け尽くす)」と言うように、餓鬼や地獄の苦しみをいう定型だったようで、「目連緣起」(P.2193)で目連の母の語に「數載不聞漿水氣、飢羸遍躰盡成瘡(数年水の氣配を嗅いだこともなく、餓えやつれて全身できものだらけ)」と見える。

(二〇) 清涼冷水：『佛說施餓鬼甘露味大陀羅尼經』に「從地獄出生餓鬼中、……設見美食、欲往趣之、以惱貪力、上妙美味、變成膿血、臭惡流溢。雖見大河清涼泉水、欲往取飲、爲諸水神以鐵杖打之。設無守者、清涼冷水、變爲火焰(地獄から餓鬼の中に生まれ出て、……たとえ美食を目にしようと、そこに行こうとすると、悩みと貪欲の力により、素晴らしい美味は膿んだ血に変わり、臭さ汚さがあふれ出る。大河や澄んだ泉を見ても、行って飲もうとすると、水神たちに鉄の杖で打たれる。もし守る者がいなかったとしても、澄んだ冷たい水が火焰に変わる)」と、こゝとは少し異なるが同じ語彙を多く用いた餓鬼道の描写が見える。

(一一) 膿河：『大乘唯識論』に「一切同見膿河等。膿遍滿河故名膿河(すべて膿河を見るのに同じ。膿が河中に満ちているので膿河と名付ける)」とあり、やはり餓鬼道にあるもののようである。

(一二) 香漬(餐)：この部分については、『孟蘭盆經』に「母得鉢飯、便以左手障飯、右手搏食、食未入口、化成火炭(母は鉢に入った飯を手に入れると、すぐに左手で飯を隠し、右手で取って食べたが、食物が口に入らないうちに火を吹く炭にかわってしまった)」とあり(この展開は後に見える)、唐の慧浄の撰とされる『孟蘭盆經讀述』にこれを解説して「鉢内香餐、速而變化也(鉢の中のかぐわしい食物が、たちまち変化した)」と記す。

(一三) 孃と見今飢困：BD04085 (己) は「孃と今飢困死」とする。読んで意味がわかりやすいように書き換えたか。この部分は母と目連の会話のようだが、どこからが母の言葉かは明確ではない。この前の部分も母の言葉である可能性があるが、とりあえずここから母のセリフとして訳しておく。

(一四) 命若懸絲：命が危ういことのとえ。『宋高僧傳』卷八「唐韶州今南華寺慧能傳」に「嗚呼、後世受吾衣者、命若懸絲(ああ、後世のわが衣鉢を継ぐ者は、その命懸けられた糸の如し)」と見える。

(一五) 汝若不去×悲：P.2319 (甲)・BD00876 (戊) は「汝若不去慈悲」、BD04085 (己) は「汝若不起慈悲」とする。「去」では意味が通じず、「不起慈悲」であるべきところである。BD04085 (己) 段階で修正を加えたか。

(一六) 懸沙之危事：BD00876 (戊) は「懸之危事」とする。ミスに

よる脱落か。「懸沙」は他に例がない。『校注』は「懸絲」の誤りとする。直前に「懸絲」とある点からするとそれが妥当かと思われるが、不安定な砂の上にいるという方向で理解できないこともない。

(一七) 亦不應遲曉：P2319 (甲)・BD00876 (戊) は「亦不應遲曉」とする。「曉」であれば、この句は「不應遲」で切れて、後が「曉出家之法（出家の法を知り抜けば）」となる可能性も想定できる。とりあえず底本に従って訳す。

(一八) 出家之×法、依信施而安存：BD04085 (己) は「出家之依法信施而安存」とする。誤って「依」と「法」を逆転させたものと思われるが、特に反転記号などはない。「信施」は喜捨のこと。『大般若波羅蜜多經』卷三三五「若菩薩摩訶薩欲不虛受國王大臣長者居士有情信施（菩薩大士は國王・大臣・長者・居士などの生ける者たちの施しをいわれなく受けようとはしない）」など、仏典に用例多数。「安存」は、『韓非子』（『韓非子集解』中華書局一九九八年）「孤憤」に「今襲迹於齊晉、欲國安存、不可得也（いま齊や晉と同じ道をたどって、国を安定持続させようとしても無理である）」とあるように、古くから用いられる語であるが、変文においては、「捉季布傳文」（P.3697）に「若得片雲遮頂上、楚將投來惣安存（もし帝たるべき定めにあるのなら、楚の將が身を寄せてきたらみな落ちてやろう）」とあるように、安心して身を落ち着けることをいうようである。

(一九) 恐難消化：「消化」は今日同様の意味であろう。喜捨を受けて暮らすべきなので、寺にあるものは受け入れられないということか。

(二〇) 孃々：BD04085 (己) は「阿孃」とする。後も同じ。母の自称「孃

と」と目連の呼びかけを区別するためか。

(二一) 王城舍之中：他本はすべて「王舍城中」。「之」は上に点を打って横に「卜」とあり、明らかに抹消している。おそらく「王」を飛ばしたため一文字足りないと考えて「之」を入れたが、後で「王」が抜けているのに気づいて、小字で「王」を書き込むとともに、「之」を抹消したのであろう。王舍城はマガダ国の都ラガダグリハのこと。パシダヴァ（白善山）、ギジジャクータ（靈鷲山）、ヴェーバーラ（負重山）、イシギリ（仙人掘山）、ヴェープッラ（廣普山）の五山に囲まれ、釈尊在世当時は、マガダ最大の都として文化的・経済的に栄えていた。釈尊が最も長く居住した所で、竹林園や靈鷲山などで多く説法している（『岩波仏教辞典』）。

(二二) 目連辞母、擲鉢騰空、湏臾之間、即到王舍城中：BD04085 (己) は「目連行至王舍城中」とする。BD04085 (己) は全体に読むための整理を施している形跡があり、これも物語の展開上不必要な要素を削除したかと思われる。

(二三) 行到長者門前。長者見連目非時乞食：BD04085 (己) は「到長者門前。見非乞飯」とする。これも不必要な要素を削除したかと思われるが、「非」は「非時」の誤りであろう。「非時」は適切でない時間のこと。

(二四) 盤問逗留之處：BD00876 (戊) は「般問追留之處」、BD04085 (己) は「盤問追留之處」とする。「逗留」は日本語の「逗留」同様とどまること。ここでは引き止めることであろう。『校注』は「原由、因由之義」とするが、通常の意味で問題なく解釈可能である。「追留」

も引き止める意味で普通に用いられる語であり、どちらでも意味は通る。「逗遛」を字形の類似から「追留」に誤ったのかもしれない。『校注』以下各本はこの後も散文とするが、ここにうたの前の「……之處」という定型表現があり、この次がP2319(甲)では六字二句となっており、この後からはうたではないかと思われる。

## 《唱》

S2614 (原) : 「和尚且齋×過<sup>(二五)</sup>」食時已過<sup>(二六)</sup>、乞飯將用何為。」目  
P2319 (甲) : 「和尚且齋時已過、××××、乞飯將用何為。」目  
BD00876 (戊) : 「和尚且齋×已過、食時已過、乞飯將用何為。」目  
BD04085 (己) : 「和尚且齋時已過、食時已過、訖飯將欲何為。」目

連啓言長者。「貧道阿孃亡過後、魂神一往落阿鼻。近得如來相救  
連啓言長者。「頻道阿孃亡過後、魂神一往落阿鼻。近得如來相救  
連啓言長者。「頻道阿孃亡過後、魂神一往落阿鼻。近得如來相救  
連啓言長者。「貧道阿孃亡過後、魂神一往落阿鼻。近得如來相救

出身、如枯骨氣如絲。貧道肝腸寸寸斷、痛切傍人豈得知。計亦不  
出身、如枯骨氣如絲。貧道肝腸寸寸斷、痛切傍人豈得知。計亦不  
出身、如枯骨氣如絲。貧道肝腸寸寸斷、痛切傍人豈得知。計亦不  
出身、如枯骨氣如絲。貧道肝腸寸寸斷、痛切傍人豈得知。計亦不

合非時乞、為以慈親而食之。」長者聞言大驚夢<sup>(二九)</sup>、思寸无常情不樂。

合非時乞、為以慈親而食之。」長者聞言大驚夢、思寸无常情不樂。  
合非時乞、為以慈親而食之。」長者聞言大驚夢、思寸无常情不樂。  
合非時乞、為以慈親而食之。」長者聞言大驚夢、思寸无常情不樂。

金鞍永絕晶珠心、玉貞無由上莊閣。<sup>(三〇)</sup>但且歌、但且樂、人命由と如  
金鞍永絕晶珠心、玉白無由上莊閣。但且歌、但且樂、人命猶×如  
今鞍永絕晶珠心、玉白無由上莊閣。但且歌、但且樂、人命××  
金鞍永絕晶珠心、玉貞無由上莊閣。但且哥、×××、人命由と知

×轉×燭。<sup>(三一)</sup>何覓×天堂受快樂、唯聞地獄罪人多。有時喫、有時着、  
而轉×燭。×不見天堂受快樂、唯聞地獄罪人多。有時喫、有時着、  
而轉燭。何不見天堂受快樂、唯聞地獄罪人多。有時喫、有時着、  
既×××。何不見天堂受快樂、唯聞地獄罪人多。有時着、有時喫、

莫學愚人貯多積。不如廣造未來因、誰能保命存朝夕。兩と相看不  
莫學愚人多貯積。不如廣造未來因、誰能保命存朝夕。兩と相看不  
莫學愚人多貯積。不如廣造未來因、誰能保命存朝夕。兩と相看不  
莫學愚人多貯積。不如廣造未來因、誰能保命存朝夕。兩と相看不

覺死、錢財必莫於身惜。<sup>(三二)</sup>一朝擲手入長棺、空澆塚上知何益。智者  
覺死、錢財必莫於身惜。一朝擲手入長棺、空澆塚上知何益。智者  
覺死、錢財必莫於身惜。一朝擲手入長棺、空澆塚上知何益。智者  
覺死、錢財必莫於身惜。一朝擲手入長棺、空澆塚上知何益。智者



用錢多造福、愚人將金買田宅。平生辛苦覓錢財、死後惣被他分柙。<sup>(三九)</sup>  
用錢多造福、愚人將金買田宅。平生辛苦覓錢財、死後惣被他分擘。  
用錢多造福、愚人將金買田宅。平生辛苦覓錢財、死後惣被他分擘。  
用錢多造福、愚人將金買田宅。平生辛苦覓錢財、死後惣被他分擘。

### 【現代語訳】

「和尚、食事時はすでに過ぎているのに、食事を乞うて何とする。」  
目連は長者に申します。「拙僧の母は亡くなると、魂はまっしぐらに阿鼻地獄に堕ちました。最近如来様に救い出していただきましたが、身は枯れた骨の如く息は糸の如し。拙僧は断腸の思い、その痛み他の人にはわかりませぬ。思えば時ならずして食を乞うのは不届きなれど、母のため食べさせようとするがゆえのこと。」長者は聞いて大いに驚き、諸行無常のことを思えば心樂します。死ねば金の鞍に乘ろうと真珠の如き心はとこしえに断ち切れ、玉のかんばせの美女も寵愛受けるすべとてありはせぬ。とりあえずは唱ってばかり、とりあえずは楽しんでばかり、なれど人の命はゆらゆらと風に揺れるともしびの如し。天国にて樂しみを受けるさまは目に入らず、聞こえるのは地獄の罪人多きことのみ。あれば食べ、あれば着て、愚人がむやみと貯め込むのを真似てはならぬ。これからの先々のための種を沢山まくにこうしたことはない、朝から夕べまでの命を確かに保証できようか。ぼんやりしているうちに知らぬ間に死がやってくる、財産をわが身のために惜しんだりしては決してならぬ。ある日いきなり棺に入れば、墓に供え物をしたとて何の役に立とう。智者は錢を用いてあまたの福を積み、愚

人は金で土地屋敷を買う。日頃から苦勞して財を求めても、死後はすべて人に分け取りにされるばかり。

### 【注】

(二五) 和尚且齋<sup>じ</sup>過<sup>こ</sup>已<sup>こ</sup>過<sup>こ</sup>、食時已過<sup>じ</sup>…『校注』が述べるように、明らかに同じことを繰り返しており、どちらかが誤って入ったものと思われる。原型は「和尚且齋已過」もしくは「和尚食時已過」で、次句「乞飯將用何為」とあわせて六字二句の韻文で、「目連啓言長者」をはさんでその後の同韻の七字句につながるものと思われる。「且」は「醜女緣起」(S4511)に「雖則容貞不強、且是國王之女(容貌がすぐれないとはいえ、国王の娘です)」とあるのと同様、意味が屈折することを示す語と思われる。

(二六) 乞飯將用何為<sup>じ</sup>BD04085(己)は「乞飯將欲何為」とする。「用」は「そのことによつて」ということかと思われるが、あまり例のない用法で意味を取りにくいため、わかりやすい「欲」に改めたか。

(二七) 計<sup>けい</sup>：「燕子賦」(P2653)に「計你含慙愧、却被怨辯之(おまえは感謝するのが筋なのに、逆に文句を言われるなんて)」とあるように、理に従って考えればということ。

(二八) 為以慈親而食之<sup>じ</sup>BD04085(己)は「為与慈親而食之」とする。「伍子胥變文」(P3213)に「南与天門作鎮、北以淮海為關(南は天門を鎮めとし、北は淮海を関とする)」とあるように、變文では「與」と「以」は通用する。BD04085(己)はこゝでも文字で読んで違和感のない方向に書き換えたか。

(二九) 驚愕・「驚愕」に同じであろう。『漢書』(中華書局一九六二年) 卷六十八「霍光傳」に「羣臣皆驚鄂失色」とあり、顔師古注に「凡言鄂者皆謂阻礙不依順也。後字作愕、其義亦同(鄂)というのはすべてためらって言いなりにはならないことをいう。後には「愕」という字を書くが、意味はやはり同じである」とあり、また『毛詩』「小雅」の「常棣」に「常棣之華、鄂不韡韡」とあり、鄭箋は「承華者曰鄂(花を受けるものを鄂という)」というように、これらの文字はあまり明確には区別されていなかったようである。

(三〇) 晶珠心・「晶」は白く清らかなこと。「晶珠」で美しい真珠を意味するか。この句の意味は明確ではないが、死んでしまえば真珠の心を持つような美女とも永遠に別れねばならぬということか。

(三一) 粧閣・「粧閣」であろう。王維「班婕妤」三首之三(『王右丞集箋注』[上海古籍出版社一九六一年] 卷一三)に「怪來妝閣閉、朝下不相迎。總向春園裏、花間笑語聲(不思議なのは化粧する高殿が閉ざされて、朝儀が終わっても迎えがないこと。みな春の園にいて、花の間から聞こえるのは談笑の声)」とあるように、美女が化粧する高殿のこと。ここでは玉の美貌の女性も死んでしまえば高殿に上がることもならぬということか。

(三二) 但且樂・BD04085(己)はこの句を欠く。

(三三) 人命由々如×轉×燭・この句は、P2319(甲)は「人命猶如而轉燭」BD00876(戊)は「人命而轉獨燭」BD04085(己)は「人命由々知既」と異同が多い。BD00876(戊)は字数も足りず、おそらくP2319(甲)の本文から「猶如」を落としてしまったかと思われる。

る。BD04085(己)は意味を通じず、何か誤りがあるものと思われる。P2319(甲)は意味は通じやすいが、「而」の使用が不自然であり、S2614(原)の本文の意味を取りにくいので無理に修正したものか。「由由」は『孟子』「萬章下」に「與鄉人處、由由然不忍去也(同郷の人といると、楽しくて立ち去るに忍びない)」とあるように楽しむ様で用いることが多い。「人の命は楽しくはしていても風に揺れるともしびの如し」とも取れるが、「由由」が後の「轉燭」を修飾しないと取るのはやや無理がある。音が近い「悠悠」がゆらゆら揺れることを形容する語として用いられる点からすると、「人の命は不安定なること風に揺れるともしびの如し」ということか。「轉燭」は杜甫の「佳人」詩に「世情惡衰歇、萬事隨轉燭(世間は衰えることを嫌うもの、万事は風に揺れるともしびのままにうつりゆく)」とあるように、風のままに揺れるともしびのこと。

(三四) 何覓×・BD00876(戊)・BD04085(己)は「何不見」とするが、これは「覓」一字を「不見」と見誤ったためであろう。これでは一句八字になってしまったため、P2319(甲)は「何」を削って「不見」としたものと思われる。するとP2319(甲)はBD00876(戊)・BD04085(己)のような「何不見」とするテキストに依拠したことになる。

(三五) 有時喫、有時着・BD04085(己)は「有時着、有時喫」と順序を逆にする。「着」で押韻すべきところだが、なぜ逆になったかは不明。

(三六) 未來因・『解深密經』卷三に「未成滿受者、謂未來因受彼果境

界（まだ受けていない者とは、先のための因を積んで果の境界を受けるのを言う）とあるように、将来果報を受けるために積む因のこと。  
(三七) 兩と相看不覺死…「兩兩相看」には仏典も含めいくつか用例はあるが、両方見合わせる、あるいは二人が互いを見合うという以上の意味はないようである。顔を見合わせばんやりしてるうちにということか。

(三八) 擗手…通常は『太平廣記』（中華書局一九六一）卷六十四「張連翹」に「婦人擘手奪一丸去（女はひったくるように一粒を奪っていつて）」のように、ひったくるような動作を意味し、後世は「劈手」と表記されることが多い。その場合、ひったくられるような突然の出来事を意味するかもしれない。ただ「擗」は裂けることや裂くことをも意味する点から考えると、離ればなれになることかもしれない。とりあえず前者で訳しておく。

(三九) 分栢：P2319（甲）とBD04085（□）は「分擘」とする。「分擘」は分けることを意味する語として後世まで用いられる。「栢」とするのは、表記がまだ確定していなかったためか。

（小松）

24

《唱》

S2614（原）：長者聞語忽驚疑、三寶福田難可遇。急催左右莫  
P2319（甲）：長者聞語忽驚疑、三寶福田難可遇。急催左右莫

BD00876（戊）…長者聞語忽驚疑、三寶福田難可遇。急催左右莫  
BD04085（己）…長者聞語忽驚疑、三寶福田難可遇。急催左右莫  
交運、家中取飯以闍梨。地獄忽然消散盡、明知諸仏不思議。長者  
交運、家中取飯与闍梨。地獄忽然消散盡、明知諸仏不思議。長者  
交運、家中取飯与闍梨。地獄忽然消散盡、明知諸仏不思議。長者  
交運、家中取飯与闍梨。地獄忽然消散盡、明知諸仏不思議。長者

手中執得飯、過以闍梨發大願。「非但和尚奉慈親、合獄罪人皆飽  
手中執得飯、過以闍梨發大願。「非但和尚奉慈親、合獄罪人皆飽  
手中執得飯、過以闍梨發大願。「悲但和尚奉慈親、合獄罪人皆抱  
手中執得飯、過与闍梨發大願。「非但和尚奉慈親、合獄罪人皆抱

滿。」目連乞得耕良飯、持鉢將來憲慈母。于時行至大荒交、手捉  
滿。」目連乞得耕良飯、持鉢將來獻慈母。于時行至大荒郊、手把  
滿。」目連乞得耕良飯、持鉢將來獻慈母。于時行至大荒郊、手把  
滿。」目連訖得耕良飯、豐鉢將來憲慈母。于時行至大荒交、手把

金匙而自哺。

金匙而自哺。

金匙而自哺。

金匙兒自哺。

【現代語訳】

長者は話を聞いてはつと驚き訝しむや、三宝（仏・法・僧）という福德を生み出す田には出会いがたきもの。側仕えの者を急き立てぐずぐずさせず、家の中から飯を取って来させて阿闍梨に与えようとしま。地獄が忽然と消え去るとは、諸仏は凡俗人の思い測れぬものであることがまざまざとわかるというもの。長者は手のうちに飯をとると、阿闍梨に渡し与えて大誓願を立てました。「和尚様の親御さんに捧げるだけでなく、獄中全ての罪人がみな満腹になりますように。」目連は米などの糧食の飯を求めて得ますと、鉢を持って母に捧げにやっ来て来ました。そこで荒廃した城壁の外へ到り、手に金の匙を持って手づから食べさせようとしています。

## 【注】

(一) 驚疑：驚き訝しむ。BD04085 (二) のみ「警芒」と作る。「芒」は「𦵏」（稻）の通字であるが（梁・顧野王撰『玉篇』卷一三「艸部」：「芒：……稻麥芒也」／同上卷一五「禾部」：「𦵏：……或作芒」）、ここでは文意が通らず、『校注』が指摘するように「驚忙（驚き慌てる）」の音通と疑われる。

(二) 三寶福田：三宝という福德を生み出す田。三宝は仏・法・僧を指す。福田は仏語で、福德（功德・善行）を生み出す田、人々が功德を植える場所の意（前出[4]注（六）「福田」参照）。「三寶福田」は仏典にしばしば見える語で、例えば唐・菩提流志訳『大寶積經』卷九八「妙慧童女會、第三十」の偈に「三寶福田勤供養、臨命終時佛現前（三宝という福德を生み出す田を供養するよう務めよ、命尽きる時に仏が姿を

現すだろう）」とある。

(三) 交：使役。～させる。

(四) 以：S2614（原）は「以」、他三本は「与」と作る。「以」は「与」と異文同義。文脈に鑑みても「（飯を阿闍梨に）与える」が正しい。

(五) 諸仏：もろもろの仏。佛は釈迦だけでなく、真理を悟った聖者も意味する。ここでは地獄の消滅に尽力した龍天八部衆などの神々も含めて「諸仏」と言うのであろう。

(六) 不思議：仏語「不可思議」（凡俗人には思い測ることができない）と同じ。

(七) 過以：渡し与える。S2614（原）・P2319（甲）・BD00876（戊）は「過以」BD04085（己）のみ「過与」と作る。前出注（四）と同様、「以」は「与」と異文同義。

(八) 發大願：發願は仏語で、願をかけること、誓いを立てること。S2614（原）・BD00876（戊）の「願」字は、敦煌文書にしばしば見られる俗字の「原+彡」が書かれている。P2319（甲）・BD04085（己）の「願」も「願」の俗字であろう。

(九) 合獄：「合」は「全部、整個（すべて、まるごと）」の意。獄中まるごと。

(一〇) 耕良飯：「耕」は「耕」の俗字（唐の顔元孫撰『干祿字書』（『叢書集成初編』、商務印書館一九三六年）「平聲」：「耕 耕：上俗、下正」）。「耕良」はふつう「耕良田（良い田地を耕す）」という形で現れ、「耕良飯」では意味がわからない。『校注』は「耕良」を「粳粮（米などの糧食）」の音通とみなし、「粳粮」の語が敦煌文書に見られる例として「晏子賦」

(P2564) の「梗稂稻米出於糞土(米の稻が糞土より出づる)」を挙げ  
ており、本訳注も『校注』の解釈に従った。P2319(甲) ははじめ  
「耕良食」と作り、「食」の右に誤字を示す「卜」記号を附し、右上に  
小字で「飯」と書き加えている。

(11) 持鉢將來：S2614(原)・P2319(甲)・BD00876(戊) は「持  
鉢將來(鉢を持って来る)」と作り、白話文学に常見される「動詞  
+ 目的語 + 将(意味なし) + 方向補語」の用法が用いられている。  
BD04085(□) は「豊鉢將來」と作り、「豊」は「鉢」にかかる修飾語「将」  
が持つという意の動詞として用いられている(訳は「大盛りの鉢を持っ  
て来る」)。

(111) 憲：S2614(原)・BD04085(□) は「憲(のり、則る)」と作るが、  
文意がとれなく。P2319(甲)・BD00876(戊) が「献(献上する)」  
と作ること、及び文脈に鑑みて、「憲」は「献」の音通とみなす。

(1111) 交：S2614(原)・BD04085(□) は「交」と作り、文意がと  
れなく。P2319(甲)・BD00876(戊) が「郊(郊外、城壁の外)」と  
作ること、及び文脈に鑑みて、「交」は「郊」の音通とみなす。

(114) 捉：S2614(原) は「捉」、他三本は「把」と作る。どちらに  
も「つかむ、握る」の意があり、文脈が通る。字形の相似による誤写  
とみられるが、どちらが原貌かは不明。

(115) 趣<sup>𠂔</sup>：S2614(原) ははじめ「匙」に字形が相似する「趣」の  
ような字を書き、上から消して、当該行の枠上(眉欄)に小字で「匙」  
と書き加えている。

《散文》

S2614(原) … 青提夫人雖遭地獄之苦、慳貪<sup>(一〇)</sup>久竟未除、見兒將得鉢飯<sup>(二)</sup>  
P2319(甲) … 青提夫人雖遭地獄之苦、慳貪久竟未除、見兒將得鉢鉢  
BD00876(戊) … 青提夫人雖遭地獄之苦、慳貪久竟未除、見兒將得飯鉢  
BD04085(□) … □□□□□□□□□□、□□□□□除、見兒將得飯鉢  
BD03789(庚) … 青提夫人雖遭地獄之苦、慳貪究竟未除、□□□□□

來、望風<sup>(一)</sup>即×生恹恹<sup>(七)</sup>、「來者三寶<sup>(一〇)</sup>、即是我兒、為我人間取飯。汝等令  
來、望風即×生恹恹、「來者三寶、即是我兒、為我人間取飯。汝等令  
來<sup>※BD04085(□) は「来」まひ。</sup>□□□□ □□□□ □□□□ □□□□

□ 望風××生恹恹、「來者三寶、×是我兒、為我人間取飯。汝等令

人息<sup>(一)</sup>×。我今自××寮<sup>(二)</sup>、況復更能相濟<sup>(三)</sup>。」目連將飯并鉢奉上、阿孃恐  
人息心。我今自××寮、況復更能相濟。」目連將飯并鉢奉上、阿孃恐  
人息心。我今自××寮、況復更能相濟。」目連將飯并鉢奉上、阿孃恐  
□□□ □□□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□

人息心。我今自救無寮、況復更能相濟。」目連將飯并鉢奉上、阿孃恐

被<sup>(四)</sup>侵棄、舉眼連看四伴<sup>(五)</sup>、左手鄣鉢<sup>(六)</sup>、右手團食、<sup>(七)</sup>來入口、變為猛火。  
被<sup>(四)</sup>侵棄、舉眼連看四伴、左手將鉢、右手團食、<sup>(七)</sup>未入口、變為猛火。  
被<sup>(四)</sup>侵棄、舉眼連看四伴、左手鄣鉢、右手團食、<sup>(七)</sup>未入口、變為猛火。  
□□□ □□□□□ □□□□ □□□□ □□□□ □□□□



被侵奪、×眼連看四畔、左手鄣鉢、右手團食、と未入口、變為猛火。

長者雖然願票、<sup>(一八)</sup>不<sup>(一九)</sup>慳<sup>(二〇)</sup>邵<sup>(二一)</sup>尤深。目連見母如斯、肝膽猶如刀割、「我今

長者雖然願票、不<sup>那</sup>慳邵尤深。目連見母如斯、肝膽猶如刀割、「我今

長者雖然願票、不<sup>那</sup>慳邵尤深。目連見母如斯、肝膽猶如刀割、「我今

長者雖然願票、不<sup>那</sup>慳邵尤深。目連見母如斯、肝膽猶如刀割、「我今

長者雖然願票、不<sup>那</sup>慳邵尤深。目連見母如斯、肝膽猶如刀割、「我今

聲聞力劣、智小人微。唯有啓問世尊、應知<sup>(二二)</sup>濟拔×路。」具看×母飯

聲聞力劣、智小人微。唯須啓問世尊、應知×濟拔之路。」具看×母飯

聲×力劣、智小人微。唯有啓問世尊、應知×濟拔之路。」具看×母飯

聲聞×劣、智小人微。唯有啓問世尊、應知×拔濟之路。」且看与母飯

聲聞×劣、智小人微。唯有啓問世尊、應知×拔濟之路。」且看与母飯

聲聞×劣、智小人微。唯有啓問世尊、應知×拔濟之路。」且看与母飯

聲聞×劣、智小人微。唯有啓問世尊、應知×拔濟之路。」且看与母飯

聲聞×劣、智小人微。唯有啓問世尊、應知×拔濟之路。」且看与母飯

聲聞×劣、智小人微。唯有啓問世尊、應知×拔濟之路。」且看与母飯

聲聞×劣、智小人微。唯有啓問世尊、應知×拔濟之路。」且看与母飯

聲聞×劣、智小人微。唯有啓問世尊、應知×拔濟之路。」且看与母飯

## 【現代語訳】

青提夫人は地獄の苦しみを味わいましたが、吝嗇は長き時を経てもとうとう取り去ることができませんでした。息子が飯の鉢を持って

やって来るのを見ると、わけもなくすぐに吝嗇の心を起こし、「やって来たのは僧侶、すなわち我が息子じゃ。わらわのために人間界で飯をもらってきたのじゃ。おぬしらは変な気を起こすでないぞ。わらわは今から一人で（飢えを）癒やそうぞ、どうしてまたその上（他の者まで）救ってやれようか。」目連が飯と鉢を捧げると、母は奪い取られるのを恐れ、目をひんむきつづけさまに四方をぐるりと見渡し、左手で鉢を遮り、右手で飯を丸めます。（しかし）食べ物口に入らぬうちに、猛火と化してしまいました。長者が（地獄の全ての餓鬼が救われるよう）強く誓願しましたのに、いかんせん物惜しみの心はとりわけ根深いものなのです。目連は母のこのような姿を見て、はらわたを刀で割かれるよう。「私は今、声聞（阿羅漢）でありながら力劣り、智力も少なく人間として取るに足りませぬ。世尊（釈迦）におうかがいするよりほかありません。きっと救う方法がわかるはず。」母が食らう所をつぶさにご覧あれ。

## 【注】

（一六）慳貪<sup>けんどん</sup>…仏語。むさぼり（貪）、物惜しみすること（慳）。自分の所有するものを欲望のままに貪ること。餓鬼道に墮する第一の因とされる。

（一七）久竟：S2614（原）・P2319（甲）・BD00876（戊）の「久竟」は、「長きを経ても（久）とうとう（竟）」と訳したが、熟語としては用例が見当たらない。BD03789（庚）は音の近い「究竟」と作る。「究竟」は「極みに達する、終極に達する」の意だが、ふつう、東晋・法顯訳『大

般涅槃經』卷上「若能究竟此等法者、即於諸法、自在無礙（これらの法を極めることができた者は、もろもろの法においても、自由自在である）」のように、良い意味で極みに達することを言う。この文脈のように「慳貪」という悪い方向性の語に用いるのは不自然であり、「慳貪が極みに達している」と訳すのが妥当か、疑念が残る。また「究竟」は副詞的に「とうとう、最後まで」の意で使われることもあるが、用例は早期のものでも宋・蘇軾「觀妙堂記」（『蘇軾全集』（上海古籍出版社二〇〇〇年）卷一二）の「況乎妙事了無可觀、既無可觀、亦無可說。欲求少分可以觀者、如石女兒、世終無有。欲求多分可以說者、如虛空花、究竟非實（まして妙なるものというのを見ることはできず、見ることもできないからには、言葉にすることもできぬもの。見ることでできるものをいくらか求めても、石女兒（仏典において、虚空花・亀毛・兎角とともに、存在しない真でないものの比喩として使われる）の如く、世にはどこにも存在せぬのだ。言葉にすることのできるものを多く求めても、虚空に咲く花の如く、結局は本当ではないのだ）」である。

（二八）望風…『唐五代語言詞典』は「凭空、無端（わけもなく）」と解釈し、根拠として敦煌文書の「燕子賦」(S214)、「鶯子到來、即欲向前詞謝。不悉事由、望風惡罵」(燕の巢を借りて休んでいた所へ) 燕がやってきたので、すぐに進み出て礼を述べようとしました。「しかし燕は」事の経緯も知らず、わけもなく口汚く罵りました」を挙げる。「燕子賦」(P2191)には「鶯子到來、望風惡罵（燕はやって来ると、わけもなく罵った）」という用例も見える。故に本訳注は、目連の母親には慳貪の気性が染みついていたため、目連が飯を持ってき

たのを見ると、わけもなく自然と吝嗇の心が湧き上がってきた、と解釈した。但し「望風」はふつう「遠くを仰ぎ見る」の意で（梁・蕭統編『文選』（『新校訂六家注文選』、鄭州大学出版社二〇一五年）卷四一書上「李陵」答蘇武書、「遠託異國、昔人所悲、望風懷想、能不依依（私は遠い異國に身を置いています、昔の人が悲しんだように、遠く故郷を望んで懐かしみ、恋い慕わずにはおられません）」の李周翰注に「望風、謂遠望也（望風は、遠くを仰ぎ見ることを言う）」とある）、ここでもその意で文脈が通らないことはない（前掲した「燕子賦」の二例も、「遠くを眺めて」と解釈できぬこともない）。もう一つ、「周囲の動向や戦況の風向きを見ること」の意もあるが、ここでは文脈が通らない。

（一九）怵惜…吝嗇、物惜しみ。「怵」は「慍」の異体字「慍」・「慍」の略字で（宋の丁度ら撰『集韻』（上海古籍出版社、上海図書館蔵述古堂影宋抄本影印、一九八五年）卷七去聲上「二十二稊」、「慍・慍」鄙也。或作慍」、「吝」（惜しむ）に通じる（金の韓道昭撰『五音集韻』（四庫全書本）卷十一「一震（稊同用）」、「慍」■（井口注：慍か）…鄙。慍本亦作吝）。

（二〇）三寶…一般的に仏・法・僧の三つを宝にたとえる語として使用されるが、ここでは単に僧侶を指す。前出[8]注（二八）「三寶」参照。

（二一）汝等令人息×…「令人」はこのままでは文意がとれないため、項楚校に従い、「令」を「各」の訛字、即ち「各人」（各自）とみなす。また句末について、S2614（原）は「息」（休む、気を休める、とどまる）、他三本は「息心」（俗念を取り除く、変な気を起こさない）とする。「息」

であれ「息心」であれ、この散文に対応する直後の唱（後出<sup>25</sup>第六句）の「諸人息意慢承忘（みな希望を捨てて指をくわえておれ）」と矛盾しない。但し、前後の句が四字句・六字句で統一されており、S2614（原）のような奇数句だと語感に違和感があることから、元は他三本のように「息心」だったのが、S2614（原）に到る過程で一字脱落したのではないかと推定される。

(二二) 我今自××寮：「寮」は『説文解字』卷七上に拠れば「柴祭天也（柴を焼いて神を祀る）」の意だが、ここでは文意が通らない。『校注』は直後の唱（後出<sup>25</sup>第三・四句）に「我兄遠取人間飯、將來自擬療飢坑（我が息子が遠くから人間の飯を取って来た、持ってきて自ら飢えを癒やそうというつもりじゃ）」とあることから、「寮」を「療」（癒やす）の略字と解釈しており、本訳注もこれに従った。或いは、三句後にある「奪」の俗字「棄」（上部は「夷」に字形が似ていることから、「奪」（奪う）の誤字である可能性も疑われる。句全体の文意もとりにくい。直後の唱（後出<sup>25</sup>第五句）の母の言葉「獨喫猶看不飽足（一人で食べるにもやはり十分でないやうなのにな）」に鑑みるに、S2614（原）・P2319（甲）・BD00876（戊）の「我今自寮」は「わらわは今から一人で（飢えを）癒やそうぞ」、BD03789（庚）の「我今自救無寮」は「わらわは今一人で（飢えを）救おうにも癒やされないのに」という意か。ちなみにBD03789（庚）が六字句に作るの、前後の句が六字句であるのに合わせた結果と考えられる。

(二三) 況復更能相濟：「況」は「何況」（反語）の意。「どうしてまたその上（他の餓鬼まで）救ってやれようか」と訳出。

(二四) 侵寮：奪い取る。正確には「侵」の行人偏の右に「一」があり、「寮」の上部を「夷」と作っている。「侵」は「侵」の俗字で（唐の顔元孫撰『千禄字書』「平聲」、「侵・侵・竝上俗、下正」）、さらに行人偏の右に「一」がある形も敦煌文書にしばしば見られる（例えば「發願文」(S223)の「若有邪魔、及諸惡鬼、於三寶所、起興害心、我等諸王、已誓願力、不令侵擾（もし妖魔や諸惡鬼が三宝の所で人や物を害する心を起こせば、我らの諸王は善願功德の力によって騷擾させない）」）。「棄」は「奪」の俗字（『千禄字書』「入聲」、「棄・奪・竝上俗、下正」）。

(二五) 四伴：S2614（原）・P2319（甲）・BD00876（戊）の「四伴」は、用例は少ないものの、本変文では「四辺・四周」の意で使われている。前出<sup>5</sup>注（二八）「四邊」参照。BD03789（庚）は、より一般的な語彙である「四畔」と作る。

(二六) 鄣鉢：鉢を遮る。「鄣」は本来地名であるが（『説文解字』卷六下、「鄣：紀邑也」）、その意の用例は稀で、古籍ではふつう「障（遮る）」の通字として使われる。『敦煌俗字典』（上海教育出版社二〇〇五年）は敦煌文献の例として、『妙法蓮華經』（敦博072、『甘肅省藏敦煌文獻』（甘肅人民出版社一九九九年）卷四の「無量無邊、無礙無鄣（果てしなく、自由自在である）」などを挙げる（五四四頁）。他に時代の近い文献を挙げれば、宋の歐陽脩・宗祁ら撰『新唐書』卷一二七「張嘉貞傳」に「（武后）召嘉貞見内殿、以簾自鄣（武則天は）張嘉貞を召して内殿でお目通りになるに、簾で自らを遮った」とある。P2319（甲）のみ「將鉢（鉢を持つ）」と作るが、『校注』は「將」が「障」の音に

近い故の誤りとみなす。

(二七) 團食：「團」は丸く囲むこと、或いはその形を言う（『説文解字』卷六下、「團：團也」）。「團食」は「食べ物を球形にしたもの」、即ち団子のような食べ物の意で使われることが多く、例えば宋代の例になるが天息災（法賢）訳『大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經』卷六に（「阿闍梨」又以酪蜜酥粳米、和爲團食八千箇（阿闍梨は）牛乳・蜂蜜・酥・米を用い、こねて八千個の団食にした）と見える。また『校注』は西晋・竺法護訳『佛説盂蘭盆經』の經文に「目連悲哀、即鉢盛飯、往餉其母。母得鉢飯、便以左手障鉢、右手搏飯。食未入口、化成火炭（目連は悲しみ、すぐに鉢に飯を盛り、母に食べさせに行きます。母は鉢を手に入れたと、たちまち左手で鉢を遮り、右手で飯をこねて丸くします。飯は口に入らぬ内に、炭と化してしまいました）」とあることを根拠として、「團」を「搏（こねて丸くする）」という動詞と同義とみなす。

(一八) 願票：S2614（原）・P2319（甲）・BD00876（戊）は「願票」と作るが、用例が見当たらず語義不詳。本訳注は「票」を「標・標（志を立てる）」の略字とみなし、「願票」を仏教で謂う所の「誓願する、願をかける」の意と解釈した（但し「願標」「願標」という熟語の用例は見当たらず）。BD03789（庚）のみ「願重（強く願う）」と作るのは、「願票」の意がとれなかったために改変した結果か。

(一九) 不郝：無奈（いけません）。「郝」は「那」の異体字（『五音集韻』卷四「十五歌」「郝・■：二、或作那、同」）。

(三〇) 慳部：S2614（原）・P2319（甲）・BD00876（戊）は「慳部」と

作るが、「部」字は字書類に見当たらず、前後の文脈に鑑みて「吝」「吝」の訛字とみなした。「慳吝」であれば吝嗇、物惜しみの意。BD03789（庚）のみ「慳部」「部」は「障」の俗字。前出注（二六）参照と作る。「慳障」は仏典にしばしば見える語で、例えば隋の慧遠述『涅槃義記』卷五に「一者無障、亦名無疑、謂行施時斷離慳障。…（中略）…如是施時、心無繫縛明其無慳、不生貪著彰其無貪。遠離此二故云無障（一つには無障、また無疑とも呼ぶが、布施を行うときに慳障を捨ててことを言う。…〔中略〕…布施をする時には、心に繫縛〔煩惱に繋がれ縛られること〕が無く慳〔惜しむ心〕無きことを明らかにせよ、貪著〔貪愛・執着〕を生むことなく貪〔貪りの心〕無きことを明らかにせよ。この二つから超脱するが故に無障と呼ぶのである）」とあり、「慳障」は「物惜しみという障害」を意味する語と推定される。

(三一) 尤深：はなはだ深し。『校注』は「尤」を「猶（まだ、やはり）」に同じとみなすが、両者を通用する例があるか不明。

(三二) 肝膽：体の中の器官、はらわた。「膽」字は正確には「月＋鹿＋古」と書かれているように見えるが、異体字であろう。

(三三) 聲聞：声聞は仏語で、出家の修行僧、阿羅漢を指す。前出[3]注（二五）「通達聲聞」参照。『校注』は、「聞」字は下文の「劣」「小」「微」に対応する形容詞であるべきという理由から誤字を疑うが、「声聞」でも文意に問題はない。

(三四) 具看×母飯處：S2614（原）・P2319（甲）・BD00876（戊）は「具看母飯處（母が食らう所をうかがい覧あれ）」と作る。BD03789（庚）は「具看」を字形の相似する「且看（しばしば覧あれ）」と作り、





无端従口出、明知業報不由他。一切常行平等意、<sup>(一七)</sup> 夕復<sup>(一七)</sup> 壽心念弥陀。  
××××× ××××××××× ××××××××× ×××××××××  
无端従口出、明知業報不由他。一切常行平等意、夕復壽心念弥陀。  
無端従口出、明知業報不由他。一切常行平等意、亦復專心念弥陀。

■ 侵<sup>(一六)</sup> 鉢捨却×貪心者、淨土天堂隨意至<sup>(一七)</sup>。」

×××××××××× ×××××××××  
但鉢捨却×貪心者、淨土天堂隨意至。」  
但鉢捨却慳貪心×、淨度天堂隨意志。」

# 【現代語訳】

青提夫人はその飯を目にすると、前に進み出て迎えました。吝嗇の心を起こした彼女は、食べる前からその飯を奪われまいとやみくもにまくしたて「これはわらわの息子が現世からはるばる持ってきた飯じゃ、あの子がわらわの空腹を癒やすために持ってきたものじゃ。ひとりで食べたって足りないほどしかない。おぬしたち、食べられるな」と期待するでないぞ。」青提夫人の慳貪の業は深く、目連が持ってきた飯を口に入れるとたちまち喉から激しい炎が燃え上がりました。目連は母が飯を口にして炎が上がったのを見ると、悲しみのあまり山崩れのように胸を叩き地面に身を打ち付けました。耳と鼻から血を流し、大声で泣きながら目連が言います、「天よ、私の母を<sup>(一)</sup> 覧下さい、南閻浮提でこの飯を施された時は、その上には七尺あまりの神秘的な

光が伸びていました。おいしい食事とばかり思っておりましたら、飯は母の口に入らないうちから、変じて炎となってしまいました。慳貪の心が改まらないばかりに、母は何年も罰を受けることとなったのでありましょう。子である私の悲しみ苦しみは比べるものがないほどですが、業因によって受ける果報は代わってやることができます。世の人は妬み心を抱くものですが、ひとたび地獄に落ちても、罰はそれだけでは終わりません。かぐわしい飯も喉に入らぬうちに、猛火が母の口より溢れています。世俗の罪が現世には満ちておりますが、慳貪の罪は中でも最も多いのです。炎が口から溢れ出て途切れることがないことが、母の行いの報いであることは明白であり、他の何かによるものではありません。日々の行いは全て平等です。一心に念仏を繰り返すことです。欲深い心を捨て去ることのできた者だけが、望み通り極楽浄土へ至ることができるのです。」と。

## 【注】

(一) 夫人見願向前迎: この部分は異同がある。まず S2614 (原) の「夫人」について、P2319 (甲)・BD00876 (戊)・BD03789 (庚) は「天人」に作る。「天人」<sup>(二)</sup> は、天界に住む神々のことだが、ここは青提夫人の欲深さを描く場面であり、「天人」が登場するのは不自然である。よって原本の「夫人」に従って訳出する。次に、S2614 (原)・P2319 (甲)・BD00876 (戊) の「見願」を、庚本は「見飯」に作る。「見願」では意味が通らないので、ここは庚本に従う。「向前」は前出<sup>(三)</sup> 注 (一五) 「向前」参照。敦煌出土文献に多出する語で、前へ進み出て何事かを

申す時に使われる。「向」は到るの意、或いは介詞「在」と同義である。目連変文の中に散見する。

(二) 慳貪：前出[24]注(一六)「慳貪」既出。吝嗇なこと。けちで欲が深いこと。けんどん。南齊の求那毘地が漢訳した『百喻經』牧羊人喻に「昔有一人、巧於牧羊、其羊滋多、乃有千萬。極大慳貪、不肯外用。時有一人、善於巧詐、便作方便、往其親友、而語之言(昔、牧羊に秀でた者がいて、彼の羊はどんどん増え、その数は千万にも上った。しかし大変けちで欲深く、人に与えようとしなかった。あるとき口のうまい者がいて、教えに導く手段として、親友と一緒にこの羊飼いの元に行つて言った)」とある。

(三) 将来：持つてくること。前出[24]注(一一)「持鉢将来」同様、「将」が「持つ」という動詞として用いられている。

(四) 飢坑：空腹。すきつばら。『全唐詩』(中華書局一九六〇年)卷三八七・盧仝「月蝕詩」の「不獨填飢坑、亦解堯心憂(ただ空腹を満たすだけでなく、憂いもまた解かす)」に用例がある。

(五) 息意慳承忘：「息意」はあきらめること。「慳」は「漫」に通じる。ここでは「みだりに、むやみに、いたずらに」の意で取る。「承忘」の「忘」は「望」と音通であり、唐代の俗語「承望」(一心に期待すること、ひたすらあてにすることの意)と解する。なおこの箇所、BD089(庚)では「諸人息意滿承 亡青堤慳貪業力重」と分かち書きしている。これに従えば、夫人のせりふが「おまえたち、(飯を)もらえるなんて思っんじゃないよ」となり、他の文が「亡き青提夫人の慳貪の業は深く」と続くかたちになる。

(六) 渾墮自撲×如××山崩：「渾墮自撲」(「墮」は「搥」、「撲」は「武」にも作る)は唐代の俗語で「胸を叩き地面に倒れ伏すこと。極度に悲しんだ時にする動作。『目連緣起』(P2193)に「且知慈母罪深、雨泪渾搥自武(目連は母の罪の深さを知り、雨のように泪を流して胸を叩き地面に倒れ伏した)」の用例がある。「如山崩」の部分はBD03789(庚)のみ「由如五大山崩」となっており、「五大山」を持ち出すことで、他の本文に比べて大げさな表現となっている。

(七) 黃天：皇天に同じ。天のこと。前出[6]に「計亦不應過地獄、只恐黃天橫被誅(思うにまた地獄に行かれたはずもなし、ただ天から思いの外の冤罪を受けられたのではあるまいか)」の用例がある。前出[6]注(一四)「黃天」参照。

(八) 孃孃：母親の呼称。前出[20]の「孃と昔日行慳妬、不具來生業報恩(母は昔行いがけちで嫉妬深く、來生の業報に備えて恩の用意をしませんでした)」などに既出。また「漢將王陵變」(P3627)に「儻若一朝拜金闕、莫忘孃孃乳哺恩(もしもひとたび宮殿にて官位を授かったら、母親に乳をもらった恩と忘れて忘れるな)」の例がある。

(九) 如今痛切更無方：「痛切」は、身を切られるほどの苦痛のこと。前出[2]に「貧道肝腸寸寸断、痛切傍人豈得知(拙僧は断腸の思い、その痛み他の人にはわかりませぬ)」が既出。「無方」は際限のないさまや、匹敵するものがないさまを言う。李德裕「進幽州紀聖功碑文狀」の「陛下神武雄斷、智出無方(陛下は英明でなおかつ武勇を備えておられ、その聡明さは比類なきものであった)」など。他本「如」の箇所はBD03789(庚)では「兒」に作る。「兒」は親に対する子の自称

であり、ここでは日連の自称となる。

(二〇) 業報不容相替伐…「業報」(ごつぼうとも)は過去に行なった善悪の行為の報いのこと。本セクション注(八)に引用した前出20の例参照。「伐」は「代」の俗字。「替代」は、取って代わる、身代わりになる。他人の罪を負う場合に多く用いる。前出8に、「縦令妻妾満山川、誰肯死來相替代(たとえ妻や妾が山川に満ちていても、誰が死んで身代わりになつてくれるというでしょう)」が既出。

(二一) 世人×須懷×疾妬…「須」は当時の方言で「雖」と音通。そのためここでは「雖(〜ではあるが)」で訳出した。「疾妬」は「嫉妬」に同じ。ねたむこと。ここでは「世人」が何を妬むのが限定しづらいが、本セクション注(八)に挙げた箇所、「嬢と昔日行慳妬…(母は昔行いがけちで嫉妬深く、…)」という表現があることから、目連の母がそうであるように、世の人々が一般に嫉妬心を抱きがちであることを聴衆に論じている箇所だと推測できる。別案として「世の人々は(母の現世での贅沢な暮らしぶりを)妬みますが」も挙げておく。BD03789(庚)では「世人不須懷疾妬」に作る。この場合「世の人々は妬み心を抱く必要はありません」となる。

(一二) 咽喉…咽は咽の異体字。BD03789(庚)のみ「喉」を「雀」としているように見えるが、意味が通らないためあるいは「雀」ではなく別字かもしれない。

(二三) 俗間…「俗間」は、俗人の住んでいる世の中のこと。前出4に「俗間大有同名姓、相似顔容幾百般(世の中には同じ姓名の人は大勢いて、同じ顔の人も何百人もいます)」が既出。「俗」は「俗」の俗字。

(一四) 娑婆…仏語。梵語<sup>saṃvāsa</sup>の音訳。煩惱を抱えた衆生が苦しみに耐えて生きている所。釈迦によつて教化される三千世界の総称。現世。唐・窺基の『妙法蓮華經玄贊』巻二に「乃是三千大千世界、號爲娑婆世界也(すなわちこの三千世界を、名付けて娑婆世界と言う)」の例がある。

(一五) 壽…ここは原本・戊本の「壽」では意味が通らないので、庚本の「専心」を採る。字形の類似による誤りか。

(一六) 貪心…「貪心」(たんしんとも)は仏語。むさぼり求めて、足るを知らない心のこと。『毘尼母經』巻五の「不信者言、『沙門釋子爲貪心、故多畜大器』。信者言、『沙門釋子無貪心也。不畜大器』(信心のないものは、『僧侶は貪欲な心のために大器に多くを蓄えるものだ』と言ひ、信心のあるものは、『僧侶は貪欲な心を持たないので、大器に何も蓄えない』と言ふ)や、『法苑珠林』巻一〇九・破齋篇第九十・引證部の頌に「貪心未嘗滿、福善未曾憂。專求美飲食、飽饜無恥羞(欲深い心は未だかつて満たされることはなく、善行は未だかつて気にかげられたことがない。もっぱらうまい食べ物・飲み物を求め、腹一杯に食べて大きな石のようになっても恥じることはない)」などの例がある。

(一七) 浄土天堂隨意至…BD03789(庚)のみ「浄度天堂随意志」に作る。こちらに従えば、「意のままに極楽浄土に渡る」意となり、どちらでも意味は通じる。

(川上)

唱

S2614 (原) 青喚<sub>ト</sub>提喚言、「孝順兒、罪業之身不自亡。不得阿

P.2319 (甲) : × × × × × × × × × ×

BD00876 (戊)：青  
■<sup>提</sup>喚言、「孝順兒、罪業之身不自亡。不得阿

BD03789 (庚)：青提喚言、「孝順兒、罪業之身不自亡。不得阿マダ

S.3704 (辛) □□□□□□□□□□

行邪孝道、誰肯艱辛救耶孃。見飯未能抄入口、見火无端却損傷。

見飯未能抄入口、見火无端却損傷。

行耶孝道、誰肯艱辛救耶孃。見飯未能抄入口、見火无端却損傷。

師行孝道、誰肯艱辛救阿孃。見飯不能抄入口、大火无端却損腸。

[illegible]

慳貪去得將心念、(六)只應過有餘■(七)殃。  
阿師是孃と孝順子、与我冷水

慳貪去得將心念、只應過有百餘殃。阿師是孃と孝順子、与我冷水

慳貪去得將身念、只應過有百餘殃。阿師是孃と孝順子、与我冷水

慳貪豈得將心念、只應過去有餘殃。阿師是孃と孝順子、与我冷水

[illegible]

濟虛腸<sup>(八)</sup>。

濟虛腸。

濟虛腸。

濟虛腸。

333

## 【現代語訳】

青提が呼びかけて言うには、「孝行な息子よ、罪を犯した身は自ら滅びるには滅びられません。和尚さまの孝行がなければ、誰が辛い思いまでして母を救ってくれるでしょう。ご飯をみて未だにすくって口に入れられず、大火はどうしようもなく腸を傷つけます。慳貪の心を取り去って心で念じても、ただ過去に過ちがある（ゆえ報いを受けています）。和尚さまは母の孝順な息子、私に冷たい水を与え、弱った腸を救ってください。」

【注】

(一) 青唳<sup>ト</sup>提喚言：S2614 (原) は二字目を「喚」に作り、これを上から消して、右行間に誤字を示す記号「ト」を書き込んでゐる。四文字目の「喚」につられて誤写したのであらう。BD00876 (戊) の二文字目は判断困難だが、おそらく「提」を書こうとして書き損じて消したものかと推定される。右行間に「提」を書き込んで修正 (P2319 (甲) は缺)。

(1) 不得阿行邪孝道・BD00876(戊)は「不得阿行耶孝道」・BD03789(庚)は「不得阿師行孝道」とするが、BD00876(戊)の五文字目「耶」はS2614(原)の「邪」の誤りであろう。たとえば前出の②注(二〇)

「知其正直不心耶」では「邪」を「耶」に誤写している。しかしS2614（原）とBD00876（戊）の語順ではいずれにしても意味を取りがたい。本訳注では『校注』に従い、BD03789（庚）の「阿師行」で訳出する。

（三）耶嬢：父と母のこと。BD03789（庚）のみ「阿嬢（母）」と作る。母が目連に対して呼びかけたセリフですので、「阿嬢」の方が自然と考え、現代語訳では母と訳出した。

（四）未能：BD03789（庚）のみ「不能」と作るが意味は「未能」と同じ。P2319（甲）は本訳注25の「哭言黃天我嬢々」から該句まで省略している。

（五）見火无端却損傷：二文字目の「火」について項楚校は、該句は後出の「喫飯成猛火、喫水成猛火」と対応するゆえ「火」を「水」とするべきだと指摘する。「水」でも確かに意味は通じるが、四つのテキストは全て「火」とはつきり記している。そのため、こゝでも「火」を選択する。また『校注』は「見」は前句「見飯未能抄入口」の「見」による誤りであるという。従って、こゝではBD03789（庚）の「大火」を以て訳出する。下二文字「損傷」BD03789（庚）のみ「損腸」と作る。「損腸」と「損腸」はどちらも意味は通るが、前句「見飯未能抄入口」と後句「済虚腸」に鑑みて「損腸」とした。

（六）慳貪去得将心念：BD00876（戊）は「将心念」を「将身念」とし、BD03789（庚）は「去得」を「豈得」とする。「将身念」に関する用例はあまり見当たらないが、「将心念」について『樂邦文類』に「心中有仏将心念、念到心空仏亦忘（心の中に仏があれば心で念じて、心が空になるまで念じれば仏も忘れる）」とある。「慳貪去得将心念」は

すなわち「慳貪の心を取り去って心で念じる」の意になるか。なお『校注』の解釈「去は豈の誤り、敦煌文書では去・豈は通用する」に従えば、該句は「慳貪の心でどうして心で仏を念じられるでしょう」という意味にもなる。本訳注では前者を選択して訳した。

（七）只應過有<sup>餘</sup>殃：只應は「ただ」するはずであるの意。五字目、六字目は判断困難（「諸其」を上から塗りつぶしているように見える）。右行間に「餘」を書き込んで修正しているが、一字不足する。P2319（甲）とBD00876（戊）は「過去有百餘殃（過去には数々の禍がある）」と作り、BD03789（庚）は「過去有餘殃（過去には禍がある）」と作る。いずれも意味は通る。

（八）済虚腸：「済」は助ける、「済虚腸」は衰弱した腸を助けるの意。

#### 《散文》

S2614（原）：目連聞阿嬢索水、氣咽聲嘶<sup>（一〇）</sup>。思 寸中间、忽憶×王  
P2319（甲）：目連聞阿嬢索水、氣咽聲嘶。思 付中间、忽憶得王  
BD00876（戊）：目連聞阿嬢索水、氣咽聲嘶。思 聞时中间、忽憶×王  
BD03789（庚）：目連聞阿嬢索水、氣咽聲西<sup>（一〇）</sup>。思 寸中間、忽憶×王  
S3704（辛）：□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

舍城南有×大水、阔浪无邊、名曰恒<sup>（一〇）</sup>河之水、亦應救得阿嬢火難之苦。  
舍城南有一大水、闊浪无邊、名曰恒 河之水、亦應救得阿嬢火難之苦。  
舍城南有一大水、闊浪无邊、名曰恒 河之水、亦應救得阿嬢火難之苦。  
拾城南有一大水、闊浪无邊、名曰恒 河之水、亦應救得阿嬢火難之苦。





「王城舍之中」参照。

(一一) 恒河：梵音 Ganga-nadi の音写と訳の合成。インドヒマラヤ山脈に源を発し東流してベンガル湾に注げるガンジス河のこと。恒伽河又は恒水とも云う（『織田佛教大辞典』）。

(一二) 南閼浮提：閼浮提は梵語 Jam-bu-dvīpa の音写。我々の住む世界。南方にあることから南閼浮提・南閼浮・南瞻部洲とも呼ぶ（前出）。

[4] 注 (二) 「南閼浮提」参照。

(一四) 諸天：天上世界に住して仏法を守護する神々。諸天善神など（『広説』）。

(一五) 瑠璃寶池：「瑠璃」は前出[2]注(一〇)「瑠璃地」に記しているように、吠琉璃の略で、七宝の一つ。青い宝珠のこと。琉璃とも書く。『祕藏金寶鈔』に「大地成瑠璃寶池、寶池上又有惡字放光明成宮殿。内外莊嚴具足（大地は瑠璃の宝池になり、宝池の上にはさらに惡字があり、光を放って宮殿となる。宮殿の内外ともに莊嚴としている）」と見える。

(一六) × 鼈：P.2319 (甲) は「水魚鼈」と作るが、「水」の右横に誤字を示す「ト」記号が付されている。BD00876 (戊) と BD03789 (庚) は「魚鼈」とし BD00876 (戊) の「鼈」は一度書き損じて墨で消し、下にもう一回「鼈」を書き直している。

(一七) 即是膿河猛火：「校注」は BD03789 (庚) の一文字目を「唯」と見なすが、字形からみると「雀」にも見える。「雀」は音の近似ゆえに「却」を誤ったものと思われる。「却是」は「むしろである」であり、「青提が水を見ると、むしろ膿の河、猛火に見える」の意と

なる。つまり他のテキストとは打って変わって意外性を感じられる。

「膿河」は膿に満ちた河のこと。古くにインドでは、地獄にそのような河があると考えられていた（『広説』）。『宗鏡録』にも「天見是寶嚴地。魚見是窟宅。人見是清冷水。鬼見是膿河猛火（天が見ると宝嚴の地であり、魚を見ると洞窟であり、人が見ると清涼の水であり、鬼が見ると膿の河、猛火である）」と類似する用例が見られる。

(一八) 未見：BD03789 (庚) のみ「未及（〜に及んでいない）」と作り、意味は通る。

(一九) 更即左手託岸良由慍：一文字目は S.2614 (原) のみ「更（さらに）」、それ以外のテキストは全て「便（ただちに）」と作る。文脈から考えると「更」より「便」の方が適切と思われる。「良由」は仏典に用例の多い語で、良以とも書く。『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』「世尊我等今者二障所纏、良由不知寂常心性。唯願如來哀愍窮露。發妙明心開我道眼（世尊様、私たちは今二障（悟りを妨げる二つの障害。心を乱す煩惱障と真理を隠している所知障）につきままとわれ、まことに寂常（煩惱のないことを寂、生滅のないことを常という）の心を知らない。ただ願わくはお釈迦様が困窮して流離う人を憐れみ、妙明心を発してわが道眼を開いてください）」、『法華玄義釋籤』「故上文云此妙即法此法即妙。故得三法皆具於十、成三十妙良由於此（ゆえに上文ではこの妙すなわち法、この法すなわち妙という。ゆえに三法がそれぞれ全て十を得れば、三十妙となり、まことにこれである）」などの用例から、「良由」は「まことにである」の意であろうか。

(二〇)直爲「直」は「只(ただ)」、明代後期まで混用されていた。唐李白「塞下曲六首 其五」「橫戈從百戰、直爲衛恩甚(戈を横にかまえて百回の戦闘に参加するのは、ただ天子の恩を深くきざんでいるためだ)」などの用例が挙げられる。

(二) 心不止：BD03789 (庚) のみ「心不志（心が専一ではない）」と作り、意味を取りがたい。「志」は「止」と音通であることによる誤記か。

(111) 水未入口便成××：P.2319 (甲)、BD00876 (戊)は「水未入口便成×火」と作り、BD03789 (唐)は「水未入口變成猛火」と作る。

S.2614 (原) P.2319 (甲) BD00876 (戊) の五文字目「便」は「辯」の音通による誤りか。いずれにしても目的語がないとS.2614 (原) の

意味を取りにくい。S2614(原)が「火」あるいは「猛火」を脱落したのか、意味が通じにくいため、その他のテキストが補ったのかは定めない。

## 《散文》

2614 (原) 目連見阿孃喫飯成猛火、  
 喫水成猛火。<sup>(三三)</sup>  
 拈ニ習怕憶、<sup>(三四)</sup>悲

P2319 (甲) ∴ 目連見母×喫飯成猛火、喫水成猛火。搥胷怕憶、悲

BD00876 (戊)：目連見阿孃喫飯成猛火、喫水成猛火。搥胷怕憶、悲

BD03789 (庚)：目連見阿孃喫飯成×火、××××××  
搥兇怕憶、悲

S.3704 (辛) : □□□□□□□□ □□□□ □□□□憶、悲

號啼哭。來向仏前、遶仏三廻、却住一面。××××××白言、(三五)「××

號啼哭。來向<sup>前</sup><sub>仏</sub>、邊<sup>三</sup><sub>通</sub>、却住一面。  
× × × × ×白言、「× × × × ×」

號啼哭。來向<sup>前</sup><sub>仏</sub>、邊<sup>三</sup><sub>通</sub>、却住一面。  
× × × × ×白言、「× × × × ×」

號啼哭。來向<sup>前</sup><sub>仏</sub>、邊<sup>三</sup><sub>通</sub>、却住一面。  
× × × × ×白言、「世尊  
踰跪合掌而白、」

[illegible]

飯成火、喫水成火、如今救得阿娘火之難苦。」世尊喚言、「目連、汝阿  
飯成火、喫水成火、如何救得阿娘火難之苦。」世尊喚言、「目連、汝阿  
飯成火、喫水成火、如×救得阿娘火難之苦。」世尊喚言、「目連、汝阿  
飯成火、飲水成火、如何救得阿娘火難之苦。」世尊喚言、「目連、汝阿  
飯成火、喫水成火、如今救得阿娘大難之苦。」世尊喚言、「目連、汝阿

嬢如今×未得飯喫、无過周<sup>(一七)</sup>連一年七月十五×、廣造孟蘭盆、始得飯喫。[  
嬢如今×未得飯喫、无過周連一年七月十五×、廣造孟蘭盆、始得飯喫。[  
嬢如今×未得飯喫、无過周連一年七月十五、廣造孟蘭盆、始得飯喫。[  
嬢如今時未得飯喫、无過周連一年七月十五日、廣造孟蘭盆、始得飯喫。[  
嬢如今×未得飯喫、无過周連一年七月十五日、廣造孟蘭盆、始得飯喫。]

【現代語訳】

目連は母が食べるご飯が猛火になり、飲む水が猛火になるのを見て、胸を叩いて声を上げて泣きました。仏の前に来て、仏の周りを三周回り、一方に退けて申し上げるには「かたじけなくもお釈迦様の慈悲で母の苦しみを救ってくださいました。今食べるご飯が火になり、飲む水が火になります。今（どうやって）母の火難の苦しみを救うことができるでしょう。」お釈迦様が呼びかけて言いました。「目連、お前の母親は今まだご飯を食べることができません。次の七月十五日、世の人が広く盂蘭盆を作って善根を積めば、始めてご飯を食べることができます。」

【注】

(一三) 喫水成猛火:BD03789 (庚) は該句を脱落したように思われる。  
(二四) 瞋胃怕憶:「怕」は前出[9]注(二二)の「怕擲(軽く叩いてなでる)」と同様、叩く、なでるの意と解した。「憶(思い)」は「校注」では「臆」とし、本訳注でもそれに従う。類似する用例は『大般涅槃經』に「菴婆羅女聞佛此言、搥胸拍頭、號咷大叫(菴婆羅女「梵名 amrapālī、また菴婆羅婆利、阿梵婆羅、菴樹女に作り、また訳して捺女、奈女とも云う。「奈女耆婆経」によるに、維耶離国梵志苑中に奈樹、即ち菴沒羅あり、その樹の瘤節より諸枝を生じ、その形偃盆の如し。その下に一女兒あり、梵志これを養い名づけて奈女という」が仏のその言葉聞き、胸や頭を叩いて、声を上げて泣き叫んだ)」とある。S3704 (辛) はそれ以前のテキストが失われ、ここから現存する。

(二五) ×××××白言:BD03789 (庚) のみ該句を「珊瑚合掌而白×(跪いて合掌して言う)」と作り、さらに直後のセリフも他のテキストと異なる。P2319 (甲)、D00876 (戊)、S3704 (辛) の「×世尊慈悲救得阿娘××之苦」に対し、BD03789 (庚) は「世尊、弟子阿嬢造諸不善、墮<sup>ス</sup>樂三塗。蒙世尊慈悲救得阿嬢波咤之苦(お釈迦様、私の母親はよくない行いをして、三塗に落ちました。かたじけなくもお釈迦様の慈悲で母の地獄の苦しみを救ってくださいました)」とする。BD03789 (庚) の内容は他本より具体的であり、懇願する口調も謙虚で誠意がこもっているように感じられる。

(二六) 如今救得:今救える。P2319 (甲) と BD03789 (庚) は「如何救得(今どうやって救えるのか)」とし、BD00876 (戊) は「如何救得(もし救えれば)」とする。文脈を鑑みると、明らかに「如何救得」の方が意味は通り、適当である。本訳注もこれに従う。S2614 (原) と S3704 (辛) の「今」は上の「只今」に引かれて誤写したか。

(二七) 无過周迺一年七月十五×:BD03789 (庚) のみ「周迺(一周巡る)」を「周迺」と作るが、意味は同じ。該句は切る位置により二通りの解釈が考えられる。「无過」の後ろで切れば「一年後の七月十五日を過ぎない」「周迺」の後ろで切れば「一年をたない次の七月十五日」の意になる。いずれも意味は通るがここでは後者を以て訳出した。

(二八) 廣造盂蘭盆:「盂蘭盆」は七月十五日の自恣(解夏)を指し(前出[1]注(三七)「盂蘭盆」を参照)、地獄での苦しみを意味するといふのが通説であったが、インド・西域などでは、僧侶が他の僧たちに罪の指摘を受けて懺悔し、僧団が最も清らかになる自恣の日に、亡き

親などへの追善を願つて僧侶たちに盆器に盛った食事を布施する通例がある（『岩波仏教辞典』。「廣造孟蘭盆（孟蘭盆を広く作る）」は僧侶たちに食事を布施する例会を広く開催すること、または僧侶たちに布施する食事を多く作ることの意になろう。

（孫）

27

# 《散文》

S2614（原）：目連見阿嬢飢、白言「世尊、毎月十三×十四日可不  
P2319（甲）：目連見阿嬢飢、白言「世尊、毎月十三×十四日可不  
BD00876（戊）：目連見阿嬢飢、白言「世尊、毎月十三×十四日可不  
BD03789（庚）：目連×阿嬢飢、白言「世尊、毎月十三日十四日可不  
S3704（辛）：目連見阿嬢飢、白言「世尊、毎月十三×十四日可不  
×否。<sup>(1)</sup>要須待一年之中七月十五日始得飯喫。」世×尊×報言××。「非  
得否。要須待一年之中七月十五日始得飯喫。」世×尊×報言××。「非  
得否。要須待一年之中七月十五日始得飯喫。」世×尊×報言××。「非  
得×。要須到一年之中七月十五日始得飯喫。」世×尊×報言目連。<sup>(2)</sup>「非  
×否。要須待一年之中七月十五日始得飯喫。」世×尊×報言××。「非

但汝阿嬢當須此日、廣造孟蘭盆、諸山坐禪戒下日、羅漢得道日、提婆  
但汝阿嬢當須此日、廣造孟蘭盆、諸山坐禪戒下日、羅漢得道日、提婆

但汝阿嬢當須此日、廣造孟蘭盆、諸山坐禪戒下日、羅漢得道日、提婆  
但汝阿嬢當×次日、廣造孟蘭×、諸山坐禪解下日、羅漢得道日、啼婆  
但汝阿嬢當須此日、廣造孟蘭盆、諸山坐禪戒下日、羅漢得道日、提婆  
達多罪滅日、閻羅王歡喜日、一切餓鬼惣得普同飽滿×。」目連承仏明  
達多罪滅日、閻羅王歡喜日、一切餓鬼××普同飽滿日。」目連承佛明  
達多罪滅日、閻羅王歡喜日、一切餓鬼惣得普同飽滿日。」目連承佛明  
達多罪滅日、閻羅王歡喜日、一切餓鬼惣得普同飽滿×。」目連承仏明  
達多罪滅日、閻羅王歡喜日、一切餓鬼惣得普同飽滿×。」目連承仏明

教、便向王舍城邊塔廟之前、轉讀大乘經典。廣罪孟蘭盆善根、阿嬢就  
教、便向王<sup>※</sup>成邊塔廟之前、轉讀大乘經典。廣造孟蘭盆善根、阿嬢就  
教、便向王舍城邊塔廟之前、轉讀大乘經典。廣造孟蘭盆善根、阿嬢就  
教、便向王舍城邊塔廟之前、轉讀大乘經典。廣造孟蘭盆善根、阿嬢就  
教、便向王舍城邊塔廟之前、轉讀大乘經典。廣造孟蘭盆善根、阿嬢就  
教、便向王舍城邊塔廟之前、轉讀大乘經典。廣罪孟蘭盆善根、阿嬢就  
此盆中、始得一頓飽飯喫。  
此盆中、始得一頓飽飯喫。  
就盆中、始得一頓飽飯喫。  
次盆中、施得一頓飽飯喫。  
此盆中、始得一頓飽飯喫。

## 【現代語訳】



目連は母が飢えているのを見て、申しますには「お釈迦様、毎月十三、十四日ではいけないのでしょうか。必ず一年のうちの七月十五日を待ってから最初の飯を食べないといけないのですか。」お釈迦様は答えて言いました。「お前の母だけがこの日を待っているのではなく、広く盂蘭盆をつくるのは、諸山の座禪の戒が解かれる日、羅漢がさとりをひらく日、提婆達多の罪が減びる日、閻羅王が喜ぶ日であり、全ての餓鬼は等しく満たされるのだ。」目連は仏の教えを受けて、すぐに王舎城のそばの寺の前で大乘経典を読みました。広く盂蘭盆をして善根をつくり、母はこの盆の間に、やっと一度食事をし満たされることが出来ました。

#### 【注】

(1) 可不否：S2614 (原)、S3704 (辛) は「可不否」、P2319 (甲)、BD00876 (戊) は「不可得否」、BD03789 (庚) は「不可得」と少しずつ異なる。「可」は疑問詞、或いは許可の意か。

(11) 世尊々：BD03789 (庚) のみ踊り字が入る。「世尊世尊」と繰り返し読み込んだものか。

(111) 阿嬢：S3704 (辛) のみ「嬢」を「娘」と写しているように見える。「嬢」と「娘」について、『校注』は「嬢」は母、「娘」は若い女性を呼ぶもので本来は用法が異なるが、敦煌の写本の中では「娘」が「嬢」の借字として使われていると述べる。以下本セクション中でも「嬢」と「娘」はどちらも「母」という意味で、区別無く使われているように見受けられる。

(四) 戒下：『校注』は徐震鄴校が「解夏」とすることを挙げ、BD03789 (庚) の「解下」という表記に従う。「解夏」は夏安居の制（雨安居ともいう。雨期の間、遊行をせずに一所にとどまって修行すること）を解くこと。九月安居の修行を終えること。陰暦七月十五日に夏安居が終了し、その制を解く。解制ともいう（『広説』）。

(五) 得道：「道」は「さとり」を言う。さとりを得ること、さとりに達すること。或いは、神通力を得たことを言う（『広説』）。

(六) 提婆達多：梵語 Devadatta に相当する音写。釈迦のいとこと言われる。釈迦に従って出家をするが、釈迦を妬んでことごとく敵対し、三逆罪（出仏身血、殺阿羅漢、破和合僧）を犯したとされる（『岩波仏教語辞典』）。BD03789 (庚) のように「啼婆達多」とする表記は他の敦煌資料や仏典には管見の限り見られないが、おそらく音通による借字であろう。

(七) 歡喜日：BD03789 (庚) は「勸善日」に作り、「閻羅王が善を勧める日」とする。S2614 (原) は「日」と書いているが、本文の字が横に広がって「日（いわく）」に見えることから、「日（にち）」であると強調しようとしたものか。

(八) 廣罪盂蘭盆善根：S2614 (原) と S3704 (辛) が「廣罪…」とするが、意味が取れない。訳では他本のように「造」の字で解した。

#### 《散文》

S2614 (原) … 従得飯×已来、母子更不×見見。目連諸處尋覓阿  
P2319 (甲) … 従得飯×已来、母子更不相見。目連諸處尋覓阿

BD00876 (戊) : 從得飯×已來、母子更不相見。目連諸處尋覓阿

BD03789 (庚) : 從得飯喫已來、母子更不相見。目連諸處尋×阿

S3704 (辛) : 從得飯×已來、母子更不×見。目連諸處尋覓阿

娘不見、悲泣雨淚、來向仏前、遶仏三通、却住一面、合掌踟踞<sup>(10)</sup>。自言

娘不見、悲泣雨淚、來向仏前、遶仏三通、却住一面、合掌踟踞。自言

娘不見、悲泣雨淚、來向仏前、遶仏三通、却住一面、合掌踟踞。自言

娘不見、悲泣雨淚、來向仏前、遶×三通、却住一面、合掌踟踞。自言

娘不見、悲泣雨淚、來向仏前、遶仏三通、却住一面、合掌踟踞。自言

「世尊、阿嬢×喫飯成× 喫水成火<sup>(11)</sup>、蒙世尊慈悲、救得阿嬢火難

「世尊、阿嬢×喫飯×××成火、蒙世尊慈悲、救得阿嬢火難

「世尊、阿嬢×喫飯成火飯喫水成火、蒙世尊慈悲、救得阿嬢火難

「世尊、阿嬢×喫飯成火、飯水成火、蒙世尊慈悲、救得阿嬢火難

「世尊、阿嬢×喫飯成火、蒙世尊慈悲、救得阿嬢火難

之苦。從七月十五日得一頓飯喫已來、母子更不×相見、為當×墮×地

之苦。從七月十五日得一頓飯喫已來、母子更不×相見、為當×墮漁地

之苦。從七月十五日得一頓飯喫已來、母子更不×相見、為當×墮×地

之苦。從七月十五日得一頓飯喫已來、母子更不得相見、為當却墮×地

之苦。從七月十五日得一頓飯喫已來、母子更不×相見、為當×隨×地

獄、為×復向餓鬼<sup>(12)</sup>之途。」「世尊報言。」「汝母亦不墮地獄×餓鬼之途。

獄、為×復向餓鬼之途。」「世尊報言。」「汝母亦不墮地獄<sup>(13)</sup>及餓鬼之途。

獄、為×復向餓鬼之途。」「世尊報言。」「汝母亦不墮地獄×餓鬼之途。

獄、為當復向餓鬼之途。」「世尊報言。」「汝母亦不墮地獄×餓鬼之塗<sup>(14)</sup>。

獄、為×復向餓鬼之途。」「世尊報言。」「汝母亦不墮地獄×餓鬼之途。

×汝轉經功德造×孟蘭盆善根、汝母×轉×餓鬼之身、向王舍城中作

得汝轉經功德造×孟蘭盆善根、汝母×轉×餓鬼之身、向舍王城中作

×汝轉經功德造×孟蘭盆善根、汝母×轉×餓鬼之身、向王舍城中作

×汝轉經功德造次孟蘭盆善根、汝阿嬢轉却餓鬼之身、向王捨城中作

×汝轉經功德造×孟蘭盆善根、汝母×轉×餓鬼之苦身<sup>(15)</sup>、向王舍城中作

×黑<sup>(16)</sup>×狗×身去。汝欲得見阿嬢者、心行平等、次第乞食、莫問貧富。

×黑×狗之身去。汝欲得見阿嬢者、心行平等、次第乞食、莫問貧富。

×黑×狗×身去。汝欲得見阿嬢者、心行平等、次第乞食、莫問貧富。

一黑母狗×身去。汝欲得見阿嬢×、心行平等、此弟託飯、莫問貧富。

×黑×狗×身去。汝欲得見阿嬢者、心行平等、次第乞食、莫問貧富。

行至大富長者家門前、有一黑×狗出來捉汝袈裟銜着、作人語、即是汝

行至大富長者家門前、有一黑×狗出來捉汝袈裟銜着、作人語、即是汝

行至大富長者家門前、有一黑×狗出來捉汝袈裟銜着、作人語、即是汝

行至大富長者家門前、有一黑母苟出來捉汝袈裟銜着、作人語、即是汝

行至大富長者家門前、有一黑×狗出來捉汝袈裟銜着、作人語、即是汝

阿嬢也。」目連蒙仏勅×、遂即託鉢持盂、尋覓×阿嬢。不問貧××富阿嬢也。」目連蒙仏勅×、遂即託鉢持盂、尋覓×阿嬢。不問貧××富阿嬢也。」目連蒙仏勅×、遂即託鉢持盂、尋覓×阿嬢。不問貧××富阿嬢也。」目連蒙仏勅×、遂即託鉢持盂、尋覓×阿嬢。不問貧××富阿嬢也。」目連蒙仏勅×、遂即託鉢持盂、尋覓×阿嬢。不問貧××富

坊巷、行衣<sup>(五)</sup>通合、惣不見阿嬢。行至一長者家門前、見×××一黒×狗坊巷、行於迨通、惣不見阿嬢。行至一長者家門前、見×××一黒×狗坊巷、行於通合、惣不見阿嬢。行至一長者×門前、見×××一黒×狗坊巷、行於九通、惣不見阿嬢。行至一長者家門前、×阿嬢作一黒母苟坊巷、行衣通合、惣不見阿嬢。行至一長者家門前、見×××一黒×狗

身從宅裏出来、便捉目連袈裟咸着、即作人語と言。「阿嬢孝順子、忽是<sup>(七)</sup>×從宅×出来、便捉目連袈裟咸着、即作人語×曰。「阿嬢孝順子、忽於身從宅裏出来、便捉目連袈裟咸着、即作人語と言。「阿嬢孝順子、忽是身從宅裏出来、便捉目連袈裟咸着、即作人語喚言。「嬢と孝順子、骨是身從宅裏出来、便捉目連袈裟咸着、即作人語と言。「阿嬢孝順子、忽是

能向地獄冥路之中救阿嬢来、曲<sup>ト</sup>回何×不救狗身之苦。」  
×××冥路之中救阿嬢来、回何×不救狗身之苦。」  
能向地獄冥路之中救阿嬢来、回何×不救狗身之苦。」  
能向地獄冥路之中救阿嬢来、××可<sup>レ</sup>不救苟身之苦。」  
能向地獄冥路之中救阿嬢来、回何×不救狗身之苦。」

#### 【現代語訳】

食事をしてから、母子は会うことがありませんでした。目連はあちこち母を探しましたが会えず、悲しくて雨のように涙を流し、仏前へ行つて三回仏の周りを廻つて、一方に退き、合掌して跪き、申しますには「お釈迦様 母は食べた飯が火になり飲む水は火になりましたが、お釈迦様の慈悲によつて母を火難の苦しみから救うことが出来ました。七月十五日に一度飯を食べてから、母子は会えていません。地獄に堕ちたのでしょうか。それとも餓鬼の道に向かったのでしょうか。」お釈迦様は答えて言いました。「お前の母は地獄や餓鬼道に堕ちたのではない。お前が経を読んで功德を積み、盂蘭盆をした善根で、お前の母は餓鬼の身を転じて王舎城の中で黒い犬になった。母に会いたいのならば、心と行いを平等にし、順に飯を乞い、貧富を問うことをするな。長者の門の前まで行つたところで、一匹の黒い犬が出て来てお前の袈裟をくわえ、人の言葉を話したら、それこそがお前の母だ。」目連は仏の教えを受け、そのまますぐに托鉢して皿を持ち、母を探しました。巷で貧富を問わず、僧服を着て迎いをめぐりましたが、母はどこにもいません。長者の門の前に行きますと、一匹の黒い犬が家の中から出てきて、目連の袈裟をくわえてすぐに人の言葉を話して言いました。「母の孝順な子よ、地獄の冥路の中の母を救うことが出来たんだつたら、なぜ犬の身の苦しみは救ってくれないのです。」

#### 【注】

(九) 阿嬢：BD00876 (戊) は二字の間に「嬢」と書きかけて上から消したような跡がある。このセクション内では BD00876 (戊) は母のことを「阿嬢」と書くことが多いが、ここを「嬢」に訂正した理由は判然としない。

(一〇) 踟跪：ひざまづく仕草。㉒注 (一六)「踟跪」前出。

(一一) 喫飯成×喫水成火：S2614 (原) は一度「火」を書き落とし、後から「喫」字の横に加えたと見られる。P2319 (甲)「BD00876 (戊) も後から訂正を加えているものの混乱が見られ、元にしたテキストに問題があったか、写す途中で目移りしたことが窺われる。

(一二) 為當…為復…：「為當」は「還是」と同様選択疑問文の中に使われ、「為當」「為復」「為是」とも書き、また重ねて使われる(蔣禮鴻)。敦煌変文中には『維摩詰經講經文』(P2292)「為當他國施方便、為復靈山禮寶臺(他國に教えを広めに行くのか、それとも靈山に宝台を拝礼に行くのか)」、「晁山遠公話」(S2073)「將軍為當要貧道身、為當要貧道業。(將軍は私の身が欲しいのか、それとも私の業が欲しいのか)」といった例があり、蔣禮鴻も多くの用例を挙げている。S2614 (原) は「為當…為復…」とするが、BD03789 (庚) は「為當…為當復…」として、後半を「それともまた…」という文にしていると見られる。前半の「為當」の後の「却」と呼応させたものか。(一三) 及：P2319 (甲) のみ「及」字を入れる。読み物としての文章に近づける為か。

(一四) 狗：「狗」の俗字(『敦煌俗字典』)。

(一五) 不問貧富坊巷、行衣：右の訳では「行衣」を目連の着ている

僧服と解した。「行衣」は『文殊所説最勝名義經』に「剃髮及頭陀、著大淨行衣(剃髮し煩惱を払い落とし、大淨の行衣を着る)」とあるように僧侶の服を指すと推測される。あるいは伍喬の「冬日道中」に「帶雪野風吹旅思、入雲山火照行衣(雪を帯びた野風が旅情に吹きつけ、雲に入る山火は行衣を照らす)」(『全唐詩』卷七四四)とあるように旅人の着るイメージもあり、「貧富や町の人と旅の人を問わず」と解するとも出来ると考えられる。また、P2319 (甲)「BD00876 (戊)」、BD03789 (庚) のように「衣」を「於」と見れば、「巷を貧富を問わず遍く巡り歩いた」となる。袁賓校は「衣」は「已」の代用とし、『校注』も「衣」「於」どちらも「已」であるとする。

(一六) 通合：『校注』は「通」は「匝」の俗字とし、『説文解字』の記述「旬、市也。從勹從合。合亦聲」、「市、周也」を挙げ、「匝合」とは「市旬」であると述べる。疊韻語で周囲という意味を為し、諸本の記述は「市旬」がそれぞれ変化した形であるという。右の現代語訳でも周囲をめぐるという意味に解した。また「市治」という表記は漢の揚雄が撰した『揚子雲集』卷四「劇秦美新」に「厥被風濡化者、京師沈潜、旬内市治(その感化されて育った者は、都に潜み、郊外に行き渡る)」とあり、漢代から使われていた言葉であることが窺われる(『文選註』はこれを「匝治」と表記して引用している)。BD03789 (庚) が「行漁九通」とするのは、前に見える「遶仏三通、却住一面(三回仏の周りを廻って一方に退く)」中の「通」と同じく「九回廻った」とも解せる。

(一七) 忽是…もし。「忽」は「或」の同音借字(蔣禮鴻)。「忽是」は

管見の限り敦煌變文中に用例が見えないが、「忽若」の形は目連變文や他の變文にも例がある〔17注（五）「忽若无人」前出〕。

（宮本）

28

《散文》

S.2614（原）：目連啓言、「慈母、由兒不孝順、殃及慈母、墮落三  
P.2319（甲）：目連啓言、「慈母、由兒不孝順、殃及慈母、墮落三  
BD00876（戊）：目連啓言、「慈母、由兒不孝順、殃及慈母、墮落三  
BD03789（庚）：目連啓言、「慈母、由兒不孝順、殃及慈母、×落三  
S.3704（辛）：目連啓言、「慈母、由兒不孝順、殃及慈母、隨落三

塗、寧作狗身於此。寧<sup>ト</sup>作××餓鬼之途。〔阿嬢<sup>四</sup>嘆言、「孝順兒、受  
塗、寧作狗身於此。×你作××餓鬼之途。〕〔阿嬢<sup>孝</sup>嘆言、「孝順兒、受  
塗、寧作狗身於此。×你作××餓鬼之途。〕〔阿嬢<sup>孝</sup>嘆言、「孝順兒、受  
塗、寧作狗身於此。寧×在地獄我鬼之途。〕〔阿嬢<sup>孝</sup>嘆言、「孝順兒、受  
途、寧作狗身於此。×你作××餓鬼之途。〕〔阿嬢<sup>孝</sup>嘆言、「孝順兒、受

此狗身音啞報、行×住坐臥得存<sup>（五）</sup>。飢即於坑中食人不淨、渴飲長流以  
此狗身音啞報、行×住坐臥得存×。飢即於坑中食人不淨、渴飲長流以  
此狗身音啞報、行×住坐臥得存×。飢即於坑中食人不淨、渴飲長流以  
次尚身音啞報、行×住坐臥得安寧。飢即×坑中食×不淨、渴飲長流以

此狗身音啞報、行×住坐臥得存×。飢即於坑中食人不淨、渴飲長流以

濟<sup>（九）</sup>虛。朝聞長者念三寶、莫聞娘子誦尊經。寧作狗身受大地不淨、耳  
濟<sup>（九）</sup>虛。朝聞長者念三寶、夜間娘子誦尊經。寧作狗身受大地不淨、耳  
濟<sup>（九）</sup>虛。朝聞長者念三寶、夜間娘子誦尊經。寧作狗身受大地不淨、耳  
濟<sup>（九）</sup>虛。朝聞長者念三寶、夜間娘子誦尊經。寧作狗身受大地不淨、耳  
濟<sup>（九）</sup>虛。朝聞長者念三寶、夜間娘子誦尊經。寧作狗身受大地不淨、耳  
濟<sup>（九）</sup>虛。朝聞長者念三寶、夜間娘子誦尊經。寧作狗身受大地不淨、耳

濟<sup>（九）</sup>虛。朝聞長者念三寶、莫聞娘子誦尊經。寧作狗身受大地不淨、耳

中不聞地獄之名。〕目連引得阿嬢往於王舍城中仏塔之前、七日七夜、  
中不聞地獄之名。〕目連引得阿嬢往於王舍城中仏塔之前、七日七夜、  
中不聞地獄之名。〕目連引得阿嬢往於王舍城中仏塔之前、七日七夜、  
中不聞地獄之名。〕目連引得阿嬢往於王舍城中仏塔之前、七日七夜、  
中不聞地獄之名。〕目連引得阿嬢往於王舍城中仏塔之前、七日七夜、  
中不聞地獄之名。〕目連引得阿嬢往於王舍城中仏塔之前、七日七夜、

轉誦大乘經典、懺悔×念戒。阿嬢乘此功<sup>（四）</sup>德、轉却狗身、退却狗皮、  
轉誦大乘經典、懺悔×念戒。阿嬢乘此功<sup>（四）</sup>德、轉却狗身、退却狗皮、  
轉誦大乘經典、懺悔×念戒。阿嬢乘此功<sup>（四）</sup>德、轉却狗身、退却狗皮、  
轉誦大乘經典、懺悔×念戒。阿嬢乘此功<sup>（四）</sup>德、轉却狗身、退却狗皮、  
轉誦大乘經典、懺悔×念戒。阿嬢乘此功<sup>（四）</sup>德、轉却狗身、退却狗皮、  
轉誦大乘經典、懺悔×念戒。阿嬢乘此功<sup>（四）</sup>德、轉却狗身、退却狗皮、

掛於樹上、還得女人身、全具人扶<sup>（六）</sup>圓滿。目連啓言、「阿嬢、人身難得、  
掛於樹上、還得女人身、全具人扶<sup>（六）</sup>圓滿。目連啓言、「阿嬢、人身難得、  
掛於樹上、還得女人身、全具人扶<sup>（六）</sup>圓滿。目連啓言、「阿嬢、人身難得、  
掛於樹上、還得女人身、全具人扶<sup>（六）</sup>圓滿。目連啓言、「阿嬢、人身難得、  
掛於樹上、還得女人身、全具人扶<sup>（六）</sup>圓滿。目連啓言、「阿嬢、人身難得、  
掛於樹上、還得女人身、全具人扶<sup>（六）</sup>圓滿。目連啓言、「阿嬢、人身難得、



中 衆國難生、仏法難聞、善心難發<sup>(七)</sup>。「嘆言阿娘、「今得人身、便<sup>(八)</sup>即終  
中×國難生、仏法難聞、善心難發。」嘆言阿娘、「今得<sup>人</sup>身、即便<sup>終</sup>終  
中×國難生、仏法難聞、善心難發。」嘆言阿娘、「今得人身、即便終

福<sup>(九)</sup>。」  
福。」  
福。」

## 【現代語訳】

目連は申し上げます、「母上、わたくしが親不孝なばかりに、母上も巻き添えにして災いが及び、三途へと落ちてしまわれましたが、いっそ犬の身でここにおられるほうがましですか。それとも地獄で餓鬼の道におられる方がましですか。」母は呼びかけて申します、「孝行息子よ、このように犬の身で口がきけない報いを受けてはいても、日常は安らかなものです。お腹がすけば穴ぐらの中で人の不浄を食べ、のどが渴けば川の水を飲んで渴きを癒やします。朝には長者が三宝を念じ

るのを聞き、暮れには奥様がお経をとなえるのを聞きます。いっそ犬の身になって大地の不浄を浴びたとしても、耳の中で地獄の名を聞かないほうがましです。」目連は母をつれて王舎城の中の仏塔の前に行きますと、七日七晩、大乘経典を転読し、懺悔して戒律を念じました。母はこの功德のおかげで、犬の身をすっかり転じ、犬の皮を脱ぎ捨てて、木の上にかけると、女性の身へと戻り、人の形をすっかり円満にそなえました。目連は申し上げます、「母上、人の身は得がたく、中国には生まれがたく、仏法は聞こえがたく、善心は起こりがたいものでございます。」母に呼びかけて申します、「いま人の身を得たのですから、ただちに善行をして徳を積みましょう。」

## 【注】

(一) 殃及…巻き添えで災いが及ぶ。『法苑珠林』卷七一・欲蓋篇第八十一・述意部第一「又遣教經云、五根賊禍、殃及累世(また『遺教經』にいわく、五根(眼根・耳根・鼻根・舌根・身根)の五つの感覚器官という賊がもたらす災厄は、幾世代も巻き添えにして災いが及ぶ)」。BD03789(唐)は「史及」に作る。

(二) 墮落三塗…「墮落」は仏語で現在いる境界より低いところに落ちること。S3704(辛)は「随落(したがって落ちる)」、BD03789(唐)は「落」一字に作る。「三塗」は「三途」に同じ。火途(地獄道)・血途(畜生道)・刀途(餓鬼道)のこと。前出[1]注(四)「三塗業消」参照。S3704(辛)のみ「三途」とする。

(三) 寧<sup>作</sup>××餓鬼之途:S2614(原)は「寧(いっそ)のほうがいい」]

を墨で消して「你」に改めており、P.2319 (甲)「BD00876 (戊) S.3704 (辛) の「你作餓鬼之途」と一致する。『選注』が指摘するように「你」が「寧」と音が近いことによる誤りであれば「いっそ餓鬼道となるほうがまし」の意になるか。BD03789 (庚) のみ「寧在地獄我(餓)鬼之途(いっそ地獄の餓鬼道にいるほうがまし)」とする。その他の諸本にしたがうと、動詞「作(ゝになる)」と目的語「餓鬼之途」とが釣り合わないため、江藍生は「途」を「徒」に改めている。ただし、唯一異同が発生している BD03789 (庚) にも「途」字が見られるため、誤字の可能性は低いであろう(『校注』)。ひとまず BD03789 (庚) に従って訳す。

(四) 阿嬢：S.3704 (辛) は「阿娘」とする。いずれも意味は同じ。前出<sup>27</sup>注 (三)「阿嬢」参照。

(五) 受此狗身：受難、受傷といった語が示すように、「受」には被害を被るニュアンスが含まれる。仏教では報いとして見合った生を受けることを受生じゆせいといい、「興何悪行、受此狗身。造何善根、而得解脱(いかなる悪行のために、この犬の身に生まれたのですか。どのような善根を積めば、解脱することができのですか)」(慧覺訳『賢愚經』沙彌均提品第六十二)のように、犬に生まれ変わる描写もしばしば認められる。BD03789 (庚) は「此」を「次」に作るが、音通による誤りであろう。

(六) 音啞：「音啞(暗啞、瘖啞)」は口がきけないこと。「生盲暗啞失本性、猪狗馬驢及駱駝。象牛虎蠅蚊虻等、皆由多欲獲此報(生まれつき盲目で口がきけず自由な意思もない(？)、豚・犬・馬・驢馬や

駱駝、象・牛・虎・蠅・蚊・虻らは、みな欲が深いせいでの報いを受けたのだ)」(闍那崛多訳『佛說月上女經』卷上)、「時大豪貴長者之子、誹謗橫枉辯積菩薩法師、言毀法戒不隨禁業、以是罪故墮於地獄滿九萬歲。生於人間、五萬世中墮在邊地夷狄之中、迷惑邪見罪蓋覆蔽。六百世中常當生盲、暗啞無舌不能言語(ときに名家の長者の子が、辯積しやく菩薩法師をいわれなく譏り、仏法の戒めを破って掟に従わなかったために、地獄へと落ちて九万年が経った。この世に生まれたものの、五万世の間は辺境に暮らす夷狄の世界へと落ちこみ、邪見(因果の道理を無視する盲見)に惑わされ罪と蓋(煩惱。不善の精神作用・心理状態が心を覆う様子からこう呼ぶ)とが「心を」覆い隠してしまった。六百世の間はいつも生まれつき盲目で、口がきけず舌もなく話すことができなかった)」(竺法護訳『佛說決定總持經』)などの諸例がある。

(七) 行と住坐(坐)臥得存×：この句は意味をとりがたい。「行住坐臥」は仏語で人間の動作の基本である歩くこと、止まること、すわること、臥せることをいう。これに戒律上の制約があるので、礼儀になった振舞いの意で「四威儀」と総称する。転じて、日常・不断・終始などの意に用いる(『岩波仏教辞典』)。S.2614 (原) は全体を七字句に整理する意図からか、踊り字をつけて「行と住坐臥(行住坐臥をおこなう)」に作る。ただしこうした言い回しは仏典には見いだしがたい。「行四威儀」の例は仏典に複数確認できるものの(佛陀什・竺道生等訳『彌沙塞部和醯五分律』卷二「房者於中可得行立坐臥行四威儀(僧侶は(僧房の)中においてはあらゆる動作をするにあたり礼儀になかった振舞いをせねばならない)」など)、S.2614 (原) を「行四威儀」と同様の

意に解釈することは文脈上妥当ではないだろう。踊り字が字間に挿入されたように見えることから、S2614(原)の底本はP2319(甲)、BD00876(戊)、S3704(辛)と同様の六字句であった可能性が考えられる。BD03789(庚)は「得存」を「得安寧」とし、全体を七字句とする。『校注』はS2614(原)ほか三本では「存」の前に「安」一字の脱落があると指摘する。ひとまずBD03789(庚)に従って訳す。

(八) 飢即於坑中食人不淨：BD03789(庚)は「飢即坑中食不淨」の七字句に作る。全体的な傾向として、BD03789(庚)は字数や表現の面でより整理されたテキストを有しているようである。「坑(坑)」は穴ぐら、またあるいは廁や便器を指す。

(九) 瀆虚：「虚」は衰弱していること、空っぽであること。ここでは二字で喉の乾きを癒やすことを指す。㉔「與我冷水、瀆虚腸(私に冷たい水を与え、弱った腸を救ってください)」、同セクション注(八)「瀆虚腸」参照。

(一〇) 莫聞：「莫」は「暮」と同義。P2319(甲)およびBD00876(戊)は「夜間」に作る。

(一一) 娘子：女主人。前句の「長者」と対であることを踏まえ、「奥方」と訳出した。P2319(甲)は「娘子」と表記するが意味は同じ。

(一二) 耳中不聞：耳の中に聞こえない。用例は多くないが、『道地經』卷一に人の死相を説明して「譬如人死時死有死相、爲口不知味、耳中不聞聲(たとえば人が死ぬときには死相というものがあり、「食べ物を」口にしても味がわからず、耳の中では声が聞こえない)」という例などが見える。

(一三) 引得：「得」は動作の持続や継続をあらわす助詞で、現代中国語の「着」に相当する。王建「春來曲」(『全唐詩』卷二九八)「可憐寒食街中郎、早起著得單衣裝(喜ばしいこと、寒食のとき街の若君は、朝早くから単衣を身にまとっている)」など。

(一四) 念戒：六念の一つで、仏の戒めを憶念すること。六念は仏・法・僧・戒・施・天の六つを、それぞれ心静かに念ずること、すなわち念仏・念法・念僧・念戒・念施・念天をいう(『広説』)。「長阿含經」卷二「復有六不退法、令法增長無有損耗。一者念佛、二者念法、三者念僧、四者念戒、五者念施、六者念天(また「六不退法」というのがあって、仏法を盛んにして損なったところを無くさせるものである。第一に念仏、第二に念法、第三に念僧、第四に念戒、第五に念施、第六に念天をいう)」など。

(一五) 退却：「退」はとりのぞくこと。ここでは犬の皮を脱ぐ動作をいう。「却」は補語で「すっかり／＼する、／＼してしまふ」の意。前句「轉却」にも同じ用法が見える。

(一六) 人扶：S2614(原)の「扶(たすける)」は文脈と合わな。P2319(甲)、BD00876(戊)「人扶」に従って人の形と解す。

(一七) 人身：難發：「人身」は人の身、人間としての身体。『大般涅槃經』卷二三に「人身難得如優曇花、我今已得。如來難値過優曇花、我今已値(人の身の得がたいことは優曇華(三千年に一度咲く花。極めてまれなことのたとえ)のようであるが、私はもう手に入れた。如來にお目にかかりがたいことは優曇華以上であるが、私はもうお目にかかった)」とあるように、人の肉体を得がたいということは仏教の

基本的な考えの一つ。目連変文では以下、「衆(中)國難生(中国に生まれがたい)」「仏法難聞(仏の教えが聞えがたい)」「善心難發(善なる心を発しがたい)」と続く。これらは仏典等において得がたいもの、めぐり逢うことの難しい境地のひととされ、しばしば列挙される。その取り合わせは一定ではないが、たとえば『大般涅槃經』卷二〇には「世有六處難可值遇、我今已得。云何當令惡覺居心。何等爲六、一佛世難遇。二正法難聞。三善心〔藤田注：「善心」は大藏經本文では「怖心」。いま明本によって改めた〕難起。四中國難生。五人身難得。六諸根難具(この世にはめぐり逢いがたい六つのことがあります、わたしはすでに〔それらを〕得ております。どうして邪惡な考えを心に住みつかせたりしましょうか。何をその六つというかと申しますと、第一に御仏の世に遇いがたいこと。第二に正しい教えが聞えがたいこと。第三に善なる心を起こしがたいこと。第四に中国に生まれがたいこと。第五に人の身を得がたいこと。第六にもろもろの根〔感覚や意思のはたらきをつかさどる器官〕を具備しがたいことです)」という六つの困難が挙げられ、『法苑珠林』卷二三・獎導篇第十五・生信部第三には『雜譬喻經』を引いて「一、值佛世難。二、正使值佛、得爲人難。三、正使成人、在中國生難。……(第一に、御仏の世にめぐり逢うことの難しさ。第二に、折よく御仏にまみえることができたとしても人間として生まれることの難しさ。第三に、ちょうど人間になることができたとしても中国に生まれることの難しさ。……)」などの「十八事難」について説かれている。目連変文でもこうした言い回しが下敷きになったものと考えられる。S2614(原)は「衆」の右肩に小字で「中」

一字を書き入れている。音通による誤りを訂正したものであろう。「中國」はガンジス川の上流・中流地域を表す「中央の地域(madhyadesa)」の訳語、あるいは中心的な地のことも指す。『選注』は「変文が我が国の俗文学作品である以上、本篇の「中國」は中華と理解してしかるべきである(變文既是我國的俗文學作品、則本篇的「中國」自應理解爲中華爲宜)」というが、文脈に鑑みて固有の国名に解する必然性は薄いように思われる。訳文では「中国」とし、「中央の地域」と解しておく。

(一八) 便即：P2319(甲)、BD00876(戊)は「即便(すぐさま)。飯にこちらで訳す。

(一九) 終福：しゅふく。多くの善い行を實踐すること(『広説』)。

#### 《散文》

S2614(原)：目連将母於娑羅雙樹下、遶仏三通、却住一面、白言、P2319(甲)：目連将母於娑羅雙樹下、遶仏三通、却住一面、白言、BD00876(戊)：目連将母於娑羅雙樹下、遶佛三通、却住一面、白言、

「世尊、与弟子阿嬢看菜道已来、從頭觀占、更有何罪。」世尊不違目「世尊、与弟子阿嬢看菜道已来、從頭觀占、更有何罪。」世尊不違目「世尊、与弟子阿嬢看菜道已来、從頭觀占、更有何罪。」世尊不違目

連之語、從三業道觀看、更率私之罪。<sup>(一四)</sup>目連見母罪滅、心甚歡喜、啓言連之語、從三業道觀看、更率私之罪。<sup>(一五)</sup>目連見母罪滅、心甚歡喜、啓言

連之語、從三業道觀看、更率私之罪。目連見母罪滅、心甚歡喜、啓言

阿嬢、<sup>(二六)</sup>「歸去來、閻浮提世界不堪停。<sup>(二七)</sup>生住死本來无住處、<sup>(二八)</sup>西方仏国

阿嬢、<sup>(二九)</sup>「歸去來、閻浮×世界不堪停。生住死本來无住處、西方仏国

女阿嬢、<sup>(三〇)</sup>「歸去來、閻浮×世界不堪停。生住死本來无住處、西方仏国

最為精。<sup>(三一)</sup>「敢得×龍奉引其前、<sup>(三二)</sup>多得天女來迎接、一往仰前刀利天、<sup>(三三)</sup>受

最為精。」感得×龍奉引其前、亦得天女來迎×、一往迎前刀利天、<sup>(三四)</sup>受

最為精。」咸得天龍奉引其前、<sup>(三五)</sup>多得天女來迎接、一往迎前刀利天、<sup>(三六)</sup>受

快樂。<sup>(三七)</sup>

快樂。<sup>(三八)</sup>

快樂。<sup>(三九)</sup>

寂初説偈度俱輪、<sup>(四〇)</sup>當時此經××時、<sup>(四一)</sup>有八万冊×、<sup>(四二)</sup>八万僧、<sup>(四三)</sup>八万優婆

寂初説偈度俱輪、<sup>(四四)</sup>當時此經××時、<sup>(四五)</sup>有八万菩薩、<sup>(四六)</sup>八万僧、<sup>(四七)</sup>八万優婆

寂初説偈度俱輪、<sup>(四八)</sup>當時此經此經時、<sup>(四九)</sup>有八万并×、<sup>(五〇)</sup>八万僧、<sup>(五一)</sup>八万優婆

塞、<sup>(五二)</sup>八万××嬢、<sup>(五三)</sup>作礼圍遶、<sup>(五四)</sup>歡喜信受奉行。<sup>(五五)</sup>

塞、<sup>(五六)</sup>八万優婆嬢、<sup>(五七)</sup>作礼圍遶、<sup>(五八)</sup>歡喜信受奉行。<sup>(五九)</sup>

塞、<sup>(六〇)</sup>八万優婆嬢、<sup>(六一)</sup>作礼圍遶、<sup>(六二)</sup>歡喜信受奉行。<sup>(六三)</sup>

# 【現代語訳】

目連は母をつれて沙羅双樹のもとへ行き、仏の周りを三度めぐると、一方に退いて、申し上げます、「お釈迦様、わたくしの母上ために悪業道をご覧になってから、最初から占ってみてください、まだ何か罪がありましようか。」お釈迦様は目連の言葉に違わず、地獄道・餓鬼道・畜生道を通してご覧になると、身勝手の罪が改まっております。目連は母の罪が減したのを見て、大いに喜び、母に申し上げます、「帰らないで、この世は留まるに堪えませぬ。生死流転には本来よりどころがなく、西方の仏のまします国こそが最もすぐれているのです。」行いに感じて天龍八部がその先がけをつかまわり、また天女も出迎えに來られ、まっすぐに忉利天をおおぎ見ると、忉利天で安樂を得たのでございます。

最初に偈を説いて俱輪をお救いになり、その時この經典を説き終えますと、八万の菩薩、八万の僧、八万の優婆塞、八万の優婆嬢たちは、礼拝して（仏の）周囲をめぐり、歓喜すると教えを信奉して修行いたしました。

## 【注】

(二〇) 目連：一面…本訳注④に「須臾之間、即至娑羅林所、遶仏三匝、却坐一面、瞻（仰）尊顏、目不暫舍（目連は）たちまちのうちに娑羅林の地に着くと、仏の周りを三度めぐり、一方に退いて、ご尊顔を拝し、まじろぎもしません」とあるほか、セクシヨン⑦にも同様の表現が見える。「娑（沙）羅雙樹」は釈迦入滅の地。前出②注（七）「往詣雙林而問仏」、⑤注（一二）「娑羅林所」などを参照。



(二一) 業(業) 道…惡業によつて連れて行かれる惡業道。六道、すなわち天上・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄のうち、修羅道以下をいう。後句に「三業道」とあることから、ここでは特に畜生・餓鬼・地獄の三者を指す。「惡業」は善行の対で、好ましくない果を招く悪い行い。前出[1]注(五)「十善」参照。

(二二) 已來…してから。「已」は「以」と音通であることから、敦煌文書ではしばしば通用される。前出[1]注(三三)「已」参照。セクシヨン[27]にも「從得飯已來、母子更不見(食事をしてから、母子は会うことがありませんでした)」などの例がある。あるいは後続の「從頭」に接続して、「これまでを初めから(占ってください)」と取ることも可能。

(二三) 觀占…占うこと。『佛本行集經』卷五「賢劫王種品下」に「於諸女中、年最幼小。初生之日、爲諸能相婆羅門師、觀占其體云、此女嫁若生兒者。必當作轉輪聖王(「釈迦の叔母で養母の摩訶波闍波提は」娘たちの中でも最年少であった。生まれてまもなく、相(人相などを見て占うこと)を能くする婆羅門が、その身体を占って言った、「この娘が嫁いで息子を産むようであれば、「その子は」かならず轉輪聖王(四天下を統一して正法をもつて世を治める王)となるだろう)」とあり、身体にあらわれた特徴や前兆、いわゆる人相・手相などを見る行為を觀占と称している。「占」は「瞻(見る)」と音が近く、また意味の上でも通じる部分があることから、通用もしくは表記上に異同が発生する傾向が顕著である。両字の音通による異同の例としては、『長阿含經』卷三を挙げることができる。ここでは諸本が「瞻葡萄華(せ

んふくげ)」とするとところを、宋本・元本・明本は「占葡萄」に作っている(「其池四面陸地生華、阿醯物多華、瞻葡萄華、波羅羅華、……(その池の周囲の陸地に植えられた花は、阿醯物多華、瞻葡萄華、波羅羅華、……)」。以下、異同はすべて『大正新脩大藏經』校記による)。

「瞻相(占う、相を見る)」と「占相」との異同の場合、音通であることに加え、意味上の類似もまた異同発生の一要因と見ることができだろう。たとえば『長阿含經』卷一三「如餘沙門婆羅門食他信施、行遮道法邪命自活、瞻相男女吉凶好醜、及相畜生以求利養、入我法者無如此事(ほかの沙門や婆羅門は別の人へと布施されたものを食し、正しい教えを否定して邪命自活(乞食や信施によるのではなく、僧として不正とされる方法や生業で生活すること)し、男女・吉凶・美醜の相や、家畜の相を見ることによつて財を求めているが、諸仏を身中に引き入れた法師にはこのようなことがない)」に見える「瞻相」の語は、元本および明本では「占相」と表記される。仏典には「觀占」と「觀瞻」との異同も複数存在する(『佛說義足經』卷下「不見不聞屠以是業自立、可得富樂、何以故、屠者無慈心哀意、觀占諸獸故(動物を屠ることを生業として、富や快樂を得たという例を見聞きしないのは、なにゆえかと言え、屠者には慈しむ心や憐れみの心がなく、獸たちを見ているからなのです)」。明本は「觀瞻」に作るなど)。「觀瞻」と表記した場合は、文字通り「見る」の意になることも多い(『方廣大莊嚴經』卷四「時有八萬四千姪女迎侯菩薩、有一萬童女觀瞻菩薩(そのとき八万四千の宮女が菩薩をお迎えし、一万の童女が菩薩の姿を目にしました)」など)。また一方で、見るという行為を通して何らかの知見

を得る、見通すといったニュアンスを感じさせる例も認められる。たとえば『不空羼索神變眞言經』卷一四には「由茲因縁得二十種殊勝功德。何等二十、謂得強憶念。……得觀瞻星曆善巧、得天耳智善巧……（この因縁によつて二十種類のすばらしい功德を受けました。二十種がどのようなものかという、私の功德を思う強い心を得たこと、……星曆を見ることによつて善巧〔善巧方便、人々の能力・素質を判断し、その利鈍に応じて理解させるよう、仏・菩薩が巧みに誘導の方法・手段を立てること。人びとの素質に応じた、巧みな教導〕を行う力を得たこと、天耳智〔天耳通。仏・菩薩などが具える六種の超人的な能力〕六神道」の一つで、自在に一切の言語・音声を聞くことのできる通力）によつて善巧を行う力を得たこと、……」という文が見え、星の運行を表した曆が「觀瞻」の対象とされている。これを仔細に読み解くことによつて何らかの象徴を見出す行為も、占いに通じると言えるかもしれない。

(二四) 三業道…畜生道・餓鬼道・地獄道の三惡道。本セクション注

(二一) 「業(業)道」も参照。

(二五) 更率私(率私)之罪…青提夫人の罪業が消滅したことを言う。「率私(率私)」は私情に惑わされて不正をはたらくこと。『新唐書』(中華書局一九九七年)卷四五・選舉志「按前代選用、皆州、府察舉、至于齊、隋、署置多由請託。故當時議者、以為與其率私、不若自舉、與其外濫、不若內收(案ずるに前王朝の任官制度では、みな州・府の単位で選拔推薦をおこなっていたが、齊・隋にいたると、任官は多く情実によるようになった。そのため当時の論者は、私情に惑わされて不

正をはたらくことは、自薦に及ばず、外で法を乱すことが横行することとは、(自薦した者を)内に収めることに及ばないと考えた)」など。『選注』には「率」は「卒(終わる、尽きる)」の誤字であるというが、その場合、目的語にあたる「私之罪」との関係がやや不自然に思われる。本訳注では「更」を動詞「改める」の意にとり、全体を「身勝手な振る舞いを行った罪を改める」と解した。

(二六) 啓言阿嬢: BD00876(戊)には「啓言」と「阿娘(嬢)」の間に女偏を書いて墨で消した跡が見える。「阿」を書き落としかけて訂正したものか。

(二七) 歸去來…以下、「最為精」までの四句は讃の形式をとり、第二句「停」と第四句「精」で押韻されている。同様の形式が『淨土五會念佛誦經觀行儀』卷下「歸西方讃」に見え、「歸去來」三字の後に七字句を三句続けるパターンが六例、五句続けるパターンが三例確認できるほか、『觀無量壽佛經疏』には五言句の讃も認められる。こうした仏讃類においては、仏を念じることによつてこの世を離れ、淨土世界への到達を祈念する点に主題を置くものがしばしば認められる。「歸去來」の句で始まる仏讃の例では、目連變文のほか、『淨土五會念佛誦經觀行儀』卷下「歸西方讃」の「急手專心念佛、彌陀淨土法門開(手を合わせ一心にかの御仏を念ずれば、極樂淨土の教えの門が開かれる)」などがある。

(二八) 閻浮提世界不壞停: P.2319(甲)、BD00876(戊)は「提」を除く七字句に作る。この句は讃の一部であるから、S.2614(原)が八字句に作るの是不適当と思われる。「提」は衍字と見て、他本のごと

く「閻浮世界不堪停」とするのが適切であろう。同様の内容を持つ仏讃の例としては、「閻浮世界不堪停、惡業因縁毎日盈（この世は留まるに堪えぬ、惡業や因縁が日々満ち満ちている）」（『淨土五會念佛略法事儀讃』卷上「西方樂讃」）、「歸去來、娑婆穢境不堪停（帰らないで、娑婆の穢れた世界は留まるに堪えぬ）」（『淨土五會念佛誦經觀行儀』卷下「歸西方讃」）のほか、「又讃云、歸去來、魔郷不可停。曠劫來流轉、六道盡皆經（また讃にいわく、帰るなんいざ、魔郷には留まるべからず。曠劫〔過去の長い時間〕にわたって転生を繰り返し、六道の世界を巡り尽くした）」（『觀無量壽佛經疏』）などがあり、内容の類型化が認められる。

（二九）**生住死本來无住處**：これも七字句と見て、「住」を除き、「生死（生まれ変わり死に変わりして輪廻すること）には本來拠りどころがない」と解釈するのが妥当か。「住」を含めた冒頭の三字は、前句末の「停」から連続させると「停生住死（とどまって生死する）」という互文構造の四字句にも見える。こうした混乱から衍字が発生したものと思われる。「无（無）住處（處）」は拠りどころがないことをいい、当該句に類似する例としては『圓滿本光國師見桃録』卷四「生死去來本無住處（生死去來には本來拠りどころがない）」などがある。

（三〇）**西方仏国最為精**：これも仏讃にしばしば歌われる内容である。『淨土五會念佛略法事儀讃』卷上に載せる「西方樂讃」の一首に「歸去來、閻浮五濁是塵埃。不如西方快樂處、到彼花臺隨意開（帰るなんいざ、この世の五濁〔ごじよく〕惡世における五つのけがれ。劫濁〔時代の濁り〕・見濁〔思想の乱れ〕・煩惱濁（煩惱のはびこること）・衆生濁（人間の資質が低

下すること）・命濁（衆生の寿命が次第に短くなること）」は塵や埃のようなもの。西方の安樂の地のほうがよく、そこへ行けば華台（けだい）〔仏や菩薩のいる蓮華の台座。浄土〕が思いのままに咲き開く」とあるほか、『淨土五會念佛略法事儀讃』卷下「歸西方讃」の「歸去來、刀山劍樹實難當。飲酒食肉貪財色、長劫將身入鑊湯。不如西方快樂處、永超生死離無常（帰るなんいざ、刀の山や劍の樹はまことに耐え難い。飲酒食肉して金銭や色欲を貪れば、長劫〔ちやうじゆう〕非常に長い時間〕にわたって身体は煮えたる釜に投じられる。西方の安樂の地において、永遠に生死を超越し無常の世界を離れるほうがよい）」などを挙げることできる。

（三一）**敢得**：「敢（思い切って）」ではやや文脈に合わない。P.2319（甲）にしたがって、音通字「感」と見なす。BD00876（戊）の「咸」字は「感」の誤りであろう。「感得」は善惡の行為の果報を感じとること。「伍子胥變文」（S.328）に「（伍）子胥祭了、發聲大哭。感得日月無光、江河混沸、忽即雲昏霧暗、地動山摧（伍）子胥は（父と兄を）祭り終えると、声をあげて泣きました。それに感じて日月は光を失い、河はボコボコと沸き、たちまちのうちに雲や霧が立ちこめて暗闇となり、大地は揺れ山は崩れます」とある。

（三二）**龍**：BD00876（戊）は「天龍」二字とし、倒置記号を付す。「龍天」は、仏の教えを守護する八種の神々「八部衆（天龍八部衆）」のこと。前出〔注（八）「八部龍天」参照。

（三三）**一往仰前刀（ち）利天**：「一往」は「まっすぐに」の意。P.2319（甲）、BD00876（戊）は「仰前」を「迎前（前に向かって、前で）」とする。

いずれでも意味は通るが、ひとまずS2614(原)に沿って「まっすぐに忉利天を仰ぐ」と訳す。『広説』によれば、「忉利天」はサンスクリット語 *Tṛyastinśaz* の音訳で、三十三天と漢訳する。須弥山の頂、閻浮提の上八万由旬(一由旬は約十一あるいは約十四キロメートル。前出[1]注(一五)「由旬」参照)のところにあり、その喜見城という城に帝釈天が住むとされる。

(三四) 受快樂・晩唐・杜牧「宣州開元寺南樓」詩(『全唐詩』卷五二四)に「小樓纔受一牀橫、終日看山酒滿傾(小さな樓閣にてようやく横になれる寢床を得て、日もすがら山を眺め酒杯を傾ける)」とあるように、「受」は納めること、手に入れること。白話文学における「受」には、望ましくないことを受ける、こうむるといった被害のニュアンスがしばしば伴うが、仏典では「上生忉利天、長夜受快樂(忉利天の高みに生まれ、長くつづく夜の間に快樂を受けた)」「(雜阿含經)卷二四「第五誦道品第一」,「身受快樂如聖所說(身に快樂を受けることはまるで聖人のおっしゃったとおりである)」「(長阿含經)卷一三「阿摩晝經第一」などの用例に見られるように、「受快樂」三字が定型句として頻出する。

(三五) 取物(初)説偈度俱輪…以下は目連故事の内容を離れ、教えを聞くことの尊さが説かれる。「度」は此岸から彼岸へとわたすこと、すなわち仏の世界へ導くこと。「俱輪」はかつて釈尊とともに修行に励んだ五比丘の筆頭、阿若憍陳如(*Ajñāta-kauṇḍīya*)の訳語の一つ。この句は悟りを得た釈尊が鹿野苑において最初の説法、すなわち初転法輪を行い、俱輪ら五人の比丘を済度したことを言う。南宋・普濟撰

『五燈會元』卷一「七佛」に「普集經云、菩薩於二月八日明星出時成道、號天人師。時年三十矣。即穆王三年癸未歲也。既而於鹿野苑中、爲憍陳如等五人、轉四諦法輪、而證道果(『普集經』にいうには、菩薩は二月八日の明星が現れたときに悟りを開き、天人師と号した。このとき三十歳であった。穆王治世三年の癸未の年にあたる。時をおかず鹿野苑にて、憍陳如ら五人のために四諦〔苦諦、集諦、滅諦、道諦の四つの真理。前出[2]注(二一)「屈指先[論]四諦去」参照〕の教義を伝え、修行の成果を証だてした)」とある。釈尊の初転法輪のことは、敦煌文献においてもしばしば語られている。目連変文の記述に類似する例としては、「太子成道經」(S2632V)の結末部分「最初說法爲五俱輪、此續空宗便令悟解(最初に五俱輪のために法を説かれ、これに続いて空宗〔万物を空とする立場の宗教〕に悟解〔理を悟ること〕せしめました)」のほか、「降魔變文」(S4398V)冒頭部「爰初鹿野苑度五俱輪、終至雙林降十梵志(初めには鹿野苑にて五俱輪〔憍陳如ら五比丘のこと〕をお救いになり、終わりに雙林〔沙羅双樹。釈迦入滅の地。[2]注(七)「往詣雙林而問仏」参照〕の下にて十人のバラモンを降伏したまいました)」などを挙げることができる。これらは変文の前後において口上のような形で語られる点が共通しており、内容および配置の両面で一つの類型となっていたものと考えられる。

(三六) 當時此經(經)××時…各テキストに異同があり、何らかの混乱が生じているようである。P2319(甲)では「此經時」三字が「當時」の右側に小字で書き添えられている。この三字を不要とみて本文から削除し、「當時有八万菩薩」と続けて読ませる意図であろうか。



BD00876 (戊) は「當時此經此經時」の七字に作るが、動詞がなく意味が通らない。「此經」の後はいずれかに二字の動詞を補おうとしたものかもしれない。「當時」の「時」について、『校注』は字形の近い「持」とする可能性を挙げる。これにしたがって訳せば「ちょうどこの經を身につけたとき」となるか。一方「選注」は「説」の誤りであろうという。本訳注では「説」字を補い、「當時説此經時」の方向で解した。「説此經時」やそれに類似する言い回しは仏典に散見され、「説此法集時、八萬菩薩得無生法忍、六萬天子遠塵離垢得法眼淨（この法集を説きたもうた時、八万の菩薩が無生法忍（一切のものが不生不滅であると認め、心を安んずること）の境地を体得し、六万の天子が遠塵離垢（けがれから遠く離れること）として法眼淨（真理を正しく見る目）を会得した）」（『佛說法集經』卷四）といったように、説法によって感化される修行者や衆生の描写を導く定型表現となっている。後掲注（四一）「歡喜信受奉行」も参照されたい。『選注』は「此經」を「佛説孟蘭盆經」であると解しているが、やや判断材料に欠ける。

(三七) 八万冊(菩薩) × 八万は八万四千の略。仏教で数の多いことを示す語（『広説』）。用例は前条に引用した『佛說法集經』など多数ある。BD00876 (戊) は「菩薩」二字を「并」に作る。これは菩薩をあらわす合字で、S2614 (原) の「冊」も同じ意図であろう。黄征『敦煌俗字典』（上海教育出版社二〇〇五年）によれば、「并」一字で菩薩を意味する例は、『御注金剛般若波羅蜜經宣演』卷上 (P2137) にも見えるという。この字は「菩提」の合字として用いられる場合もあるが（『敦煌俗字典』）<sup>1)</sup> いでは P2319 (甲) および文脈に鑑みて「菩薩」

と解す。

(三八) 優婆塞：upāsaka の音写。男性の在俗信者。もとの語義は仕える人・奉持する人。出家修行者に仕え、世話をしたのでこのようにいう（『広説』）。『法苑珠林』卷八八・八戒部第五・戒相部第六に「優婆塞者、諸經亦云清信士、亦云近佛男。優婆夷者、亦云清信女、亦云近佛女也。依如西域俗人受持五八戒者、始得喚爲優婆塞、優婆夷。衣服居止、舉動合宜、亞類出家人、在於不持戒者上坐（優婆塞は、諸經では清信士ともいい、また近仏男ともいう。優婆夷（優婆姨）は、清信女ともいい、また近仏女ともいう。西域においては在家の人が五戒（在家の仏教信者が守るべき五つの戒め。殺生・偷盜・邪淫・妄語・飲酒の禁制）と八戒（八戒齋。一日一夜を限って在家の信者が守る八つの戒め。出家生活を一日だけ守るといった形をとったもの）を守って堅持すると、はじめて優婆塞、優婆夷と呼びなしたことによる。衣服や住居、挙動が適切で、出家の人に次ぐ部類に属し、戒律を守らない者の上位に位置する）」とある。

(三九) × × 嬖姨：P2319 (甲) BD00876 (戊) はいずれも「優婆姨」に作る。S2614 (原) の「姨（おば）」一字では文脈に合わない。「優婆」二字が脱落、もしくは省略されたものと見てよいだろう。優婆姨は upāsika の音写。女性の在俗信者のこと。前条参照。

(四〇) 作礼圍遶(遶)：「圍遶」は取り囲むこと。本訳注では 18 「生杖圍遶、駢出門外（杖がぐるりと取り囲み、門外へと追い立てて）」、同 22 「如來領八部龍天、前後圍遶、放光（光）動地、救地獄苦（如來は天龍八部衆を統べ、前後を取り巻かせて、光を放ち地を揺り動か



して、地獄の亡者どもの苦しみを救いになります」に既出。仏教儀礼においては右肩を向けてまわって敬礼することをこう。「作禮圍遶」四字の例は一般に見られ、『大寶積經』卷七八・富樓那會第十七之二「具善根品第四」に「未久之間得五神通、至彌樓提駄佛本所燒處。到已作禮圍遶三匝、結跏趺坐發誓願言（いくらも経たないうちに五神通〔特別な修行者の持ちうる五種の超自然的な能力〕を得て、弥楼提駄仏がもと焼かれた場所へと至ります。到着すると礼拝して三たび周囲をめくり、結跏趺坐して誓願を立てました）」などがある。

（四一）歡喜信受奉行…「信受」は教えを信奉すること。「奉行」は仏教を奉じて修行すること（『広説』）。『大般若波羅蜜多經』卷五三七・第三分宣化品第三十一之二「時薄伽梵說是經已、無量菩薩摩訶薩衆、及諸聲聞人非人等一切大衆、聞佛所說皆大歡喜信受奉行（その時薄伽梵〔仏の異称〕が經を説き終えると、あまたの菩薩摩訶薩〔菩薩に同じ。菩薩はさとり成就を求めて修行する人。摩訶薩は偉大な志を持つ者〕たち、およびもろもろの聲聞〔教えを聞く修行僧、出家修行僧〕や人ならざるものなどの一切の人びとは、仏の説かれたことを聞いて大いに歡喜し教えを信奉して修行いたしました）」、「佛說福力太子因緣經」卷四「佛說此經已、諸苾芻等聞佛所說、皆大歡喜信受奉行（仏がこの經を説き終えると、もろもろの苾芻〔比丘に同じ。僧〕たちは仏の説かれたことを聞いて、みな歡喜し教えを信奉して修行いたしました）」をはじめとして仏典に頻出する定型表現である。同句をもって經典を締めくくる例はとりわけ多く、目連變文のこの箇所もまた仏典の類型に倣ったものと考えてよい。

S2614 (原) … 大目健連變文一卷<sup>(四三)</sup>

貞明柒年辛巳歲四月十六日淨土寺學郎薛安俊寫<sup>(四四)</sup>  
張保達文書<sup>(四七)</sup>

P2319 (甲) … 大目健連變文一卷

BD00876 (戊) … 大目健連變文一卷

太平興國二年、歲在丁丑潤六月五日、顯德寺學士郎楊顓受一人思微、發願作福、寫畫此目連變一卷。後同釋迦釈牟尼佛壹會弥勒生作仏為定。後有衆生同發信心、寫畫目連變者、同池顓力莫三途<sup>(四八)</sup>。

#### 【注】

（四一）大目健（乾）連變文一卷…各巻とも、以下は奥書にあたる。S2614 (原)、P2319 (甲)は、巻頭題「大目乾連冥間救母變文」と異なり「冥間救母」四字を欠く。P3107 (丙)については前出②注(二六)「炎と火宅難逃避」を参照されたい（なお、同巻奥書には「自從塞北起煙生（塵）詩書〔塞北に煙塵起こりてより〕と詩に書す」とも記されている。自從云々の句は敦煌文獻「斷嗣書一卷」に引く「新婦詩」に「自從塞北起煙塵、禮樂詩書總不存（塞北に煙塵起こりてより、礼樂詩書の類はことごとく失われた）」「敦煌變文集」卷七」という形で見える。P3107 (丙)は何らかの理由でこの句を引用したものと思われるが、目連變文との関係は薄い。

（四三）貞明柒（七）年辛巳歲…「柒」は「七」の大字。貞明七年は西

暦九二一年、五代・後梁の第三代皇帝末帝（朱友貞）の治世にあたる。

（四四）浄土寺…『選注』によれば、唐五代のときの敦煌の大寺。敦煌文献の奥書に見える例では、後晉・天福八年（九四三）に書写された「孔子項託一卷」（S395.1）、天福九年の「破魔變」（P2185.1）、北宋・開宝五年（九七二）干支は「癸酉」とあり、これによれば九七三年の断簡（S2894V-5）などがある。

（四五）學学郎…唐五代のときに敦煌の寺院で就学していた学生（『選注』。敦煌文献には学郎によって筆写されたものが多く残っている。

（四六）薛安俊…同名はP205（十二字曲）の巻末に「同光貳年（九二四）甲申歳、蕤賓之月（五月）、莫彫二葉（十七日）、學士薛安俊書」として見える（入矢義高編『中国古典文学大系 仏教文学集』平凡社一九七五年。字形はP2054の原文に即して一部改めた。

（四七）張保達文書…張保達は未詳。この人物の所有する文書であることを示す。

（四八）太平興國二年…三途…全体を訳すと「太平興國二年（九七七）、丁丑の年間六月五日、顕徳寺の學士郎楊願受ひとり思微し、善行をつんで福をなすことを祈願して、この目連變一卷を写す。（その功德によつて浄土へゆき）後に釈迦牟尼仏とともに弥勒が仏になるところに列座することを固く定めとする。後に信心を起こした人で、目連變を最後まで写す人がいるならば、本願の力を得て三途（に落ちること）はない」といった意になるか。「池」字は『敦煌變文集』にしたがって「持」と解釈した。

「大目乾連冥間救母變文」訳注（五）

セクション 23～28 担当者

- 23 小松 謙
- 24 井口 千雪
- 25 川上 萌実
- 26 孫 琳淨
- 27 宮本 陽佳
- 28 藤田 優子

（二〇二〇年九月三十日受理）

- （こまつ けん 京都府立大学文学部教授）
- （いのくち ちゆき 九州大学人文科学研究院講師）
- （おおが あきこ 京都大学国際高等教育院非常勤講師）
- （かわかみ めぐみ 日本学術振興会特別研究員PD）
- （そん りんじょう 京都府立大学大学院学術研究員）
- （たまき なおこ 京都府立大学大学院博士後期課程修了）
- （たむら さいこ 立命館大学言語教育センター嘱託講師）
- （ふじた ゆうこ 京都府立大学非常勤講師）
- （みやもと はるか 日本学術振興会特別研究員PD）

本訳注は小松が交付を受けている令和二年度科学研究費補助金・基盤研究C・課題番号一九K〇〇三七五「全文翻訳と詳細な注釈作成に

よる『水滸伝』の研究」、井口が交付を受けている令和二年度科学研究費助成事業・若手研究・課題番号一八K一二三一〇「明代武官を中心とした社会的異種階層間の文学的交流の研究」、川上が交付を受けている令和二年度科学研究費助成事業・特別研究員奨励費・課題番号一九J〇一九七七「『懷風藻』編纂意図の解明―日本漢文学史の構築に向けて―」、および宮本が交付を受けている令和二年度科学研究費助成事業・特別研究員奨励費・課題番号一九J〇一〇九七「漢籍解釈から見る言語観の確立―日本近世期における唐話学再評価」の成果の一部である。